備忘抄

中

1習4
775
99

1曾4
775
99

備忘抄巻之中

巻之一

辞書一覧例言

一　此書ニ載ル所ノ書目ハ予年来渉猟スル所ノ中ヨリ抄録スルモノニシテ今ソノ篇目大意等ヲ記スル特ニ世ニ稀ナル書ノミヲ挙ルニアラズ世ニ普ク行ハルヽ書ト雖モ其ノ要ヲ得タルニ於テハ必ズ之ヲ挙ゲタリ

一　此書ニ挙ル所ノ書ハ悉ク架上ニ備ヘテ以テ参考ニ供スルノ用ヲ為ス

一　此書ニ挙ル所ノ書ハ悉ク其類ノ書ヲ集メ之ヲ購ヒ求メンコトヲ期シテ以テ蔵書ノ欠ヲ補ヒ完全ヲ期スベシ

中村直道　集

國史の部に收むべしと雖も其第一第二の神代巻の書は神書の部に收め大和物語源氏物語等の歌物語の部に收むべしといへども皇朝物語宗教物語等は各其の部に收むるがごとし

一 此書は假字ばかりの格となく古書の大意をもとすれば古假字を用ゆるのこと今は假字を用ゆるのことなれども古假字のみを用ゆることも無く仮通ふさまざまの格なり

一 古書のごとく亡びて今傳はらざるもののすくなからずこれらのことを專門とする學者の有ん事を願ふ

一 假名遣は古書に從ふべきことなれども今の世の人の見なれざるを用ゆることを得ざるなり

一 古書の中にて假字書のものは假字遣の正しきを擇て當世の學者の標準とすべきこと勿論なり

一 遠境僻邑の人國學に志あるときは書籍なきがために學ぶことあたはざるべきをもおもひやるべきなり

一 多年抄錄せし書どもの再校しまほしきものもあるにつけても或は他邦より借覽せまほしく或は大部にて不日に業を卒がたきものもあるにつけても此一覽の中に收めまほしきものなり

一 巻首に和書部と漢土の書乃部と別刻せんのうらがきありゆゑなり

一 古書より聞見博きがために秘冊奥編のうづもれあるを

そぞろいさゝかものしつゝ年頃
こゝかしこもらすべけをでうち
せうとごもれる大方の君子そ
享和元年冬至日

浪華尾崎雅嘉識

群書一覧目録

巻之一

國史類
六國史類聚國史本朝通鑑大日本史の類其餘編年の書載十部と載

神書類
神道立部書十二部書卜部家書垂加の書秋齋の書神代巻中臣祓祝詞の註書其餘神學の書等

雜史類
三鑑榮花物語續世継保元平治物語盛衰記平家物語東鑑太平記櫻雲記の類其餘治乱興亡の雜記等

巻之二

記録類
百職類
禮儀類典より諸家の記録百錬鈔等に至る
律令格式の書年中行事職原公卿補任儀衆の書等

氏族類
萬多親王の姓氏録より人々の傳元亨釋書作者部類大系図知諸牒記等に至る

字書類
倭名鈔新撰字鏡等より林逸の節用集和爾雅衆雅其餘和訓いろは假名遣の書等に至る

往来類
明衡往来新猿樂記より庭訓臂鷹類聚等の往来に至る

法帖類
三國華海全書集古法帖耳比磨利帖其餘近来諸

家蔵刻の法帖等

巻之三

物語類　竹取うつほ濱松等の古物語より伊勢大和源氏狭衣
今物語撰集抄等之部

草子類　枕草子はまぐり草等より舞の書之部

日記類　紫式部和泉式部日記うげろふ日記の類

和文類　扶桑拾葉集後葉等の目録和文作例の書
等之附す

記行類　土佐日記十六夜記等より近來諸家の道の記詞林意行
集等小部

巻之四

撰集類　萬葉集二十一代集新葉集等同註釋の書八代集抄
附家集類　三十六人集より六家三十の集其餘中古近代の諸家
集小部

歌合類　寛平歌合殿上根合六百番千五百番の歌合より部類
歌合職人盡歌合等小部

百首類　定家卿の百人一首より百首部類其餘諸家の百首之部

千首類　為家卿の千首部類をはじめ近代の千首より

巻之五

類題類　新撰類題　新類題　林明題等の書

和歌雑類　和漢朗詠集梁塵秘抄求和歌等より新古今竟宴和歌皇類抄

等よりいづる

撰歌類　三十六歌仙　後歌仙　新歌仙　中古歌仙　女房歌仙　釋門歌仙
集外歌仙　自賛歌等

歌學類　和歌四式　八雲御抄　袋草子　袖中抄　藻鹽草　歌林撲撤
の類より和歌教訓の書よりろ〳〵枕詞の書等に至る

詩文類　懐風藻　經國集　本朝文粹　朝野群載　菅家文草等より
萬里の帳中香四河入海　惺窩羅山の文集　日本詩史等かいつる

醫書類　本朝古代の醫書　大同類聚方　醫略抄　頓醫抄　萬安方
其餘諸家珍藏の古写本等

教訓類　安然和尚の童子教　庭訓抄　熊澤了介の孝經外傳或問　藤井懶
齋の花實鑑　山崎闇齋の大和小学　貝原篤信の俗訓の類

釋書類　日本霊異記　說法明眼論　宝物集　撰集抄等より　釋教
題林　片岡山等に至る

管絃類　催馬樂　神樂　郢曲　琵琶　笛琴　そのほか謡曲の書等

巻之六

地理類　諸國風土記の殘欠　貝原篤信の筑前續風土記　五畿内
志の類より諸國の地志　岡說等に至る

名所類　諸國名所名寄歌集の類より　勝地吐懐編　今案名蹟考
の類に至る

隨筆類　一條禅閤の東齋隨筆より　梅鴫曉筆　河社鹽尻　其餘
諸家の雜話類に至る

雜書類　江談　古事談　古今著聞集の類　善隣国宝記　異稱
日本傳　駿北嶺言の類　好古小録　好古日録　和漢朗詠の類

集古十種目録　花押薮　萬宝全書　名物類聚の類　書籍目録
の類農業全書　四季草　圓珠経　其餘雑書数十部

群書類従　一千二百七十三種の書目収むる
總計三十四門

群書一覧巻之

國史類

本朝六國史
日本書紀
續日本紀　元正紀　養老四年五月完ル一部合八冊
和銅より日本紀と併す　紀三十巻
系図一巻　これより前の六国史ハ系図なし　今流布のものハ系図あり

直道ニ正しく布書　各書の條下ニ拝ニ
ス書の始末識論ヲ挙ク我ガ朽
錆ヲ磨ニ磨ヲ加ルニ
百七十巻
三十巻　十五本

日本紀私記
十五巻　三本
いまハ前日本紀と称せんなり　この外ニ
まだまだ多くありしなるべし
天子の和風奉じて日本紀講ず　私記と化
まうとうとうも今世ニ流布するところ
の私記ハ講書ニ
記の巻数をあげざるハ全く伝
聞ニ
九巻ニ一巻より七巻まで神代巻人代
の二字ニ二字ニ
伏り而神紀ヲ挙テ
文祿二年癸巳六月
日本紀竟宴歌　中略
二巻

十巻ハ元慶六年の豊宴の儀也大納言源公一人二首追加ノ外ハ
の豊宴ニ卅六人ニ卅四人ニ卅二人各二首と詠ず今セて四十首右十巻
人数セ十七人数四十二首外ニ統理(ムネヲサム)年ノ漢文の序一首と
のすゝ十巻ハ天慶六年の豊宴にて十七人ニ卅四人ニ
二首ニ詠ず今セて四十一首外ニ序一首橘直幹の作と古
今セて六十二首追加二首(ツケタリ)摘(エラヒ)歌(ノ)の歌二首総計六十八首なり
毎首紀中の神名人名ニ訓(ヨミ)ヲ施(ホドコ)して(マヽ)ありて万葉(マンヨウ)ノ
ひうらうれしなどうたふ(マヽ)ハ古風(コフウ)の実(マヽ)なれて深し○
裏書(ウラガキ)ニ云(イハク)右此日本紀竟宴歌上下二巻者鎌倉中書王
真跡(シンセキ)本藏(カクレ)在ニ肥後國(ヒゴノクニ)隈本城下本妙寺一矣今不慮得ニ臨写(ウツス)ヲ
與(アタフ)ニ今井似閑(ニカン)者也云々元禄十二年二月筑紫(ツクシ)ノ沖記(シルス)ス○源(ミナモト)の
うらう鶴(ツル)鶴(ツル)天皇(スメラミコト)ニ奉(タテマツル)ル歌(ウタ)なく前(サキ)の年(トシ)のよせなるべし

なりとのほりて(マヽ)これを頂戴(チヤウダイ)ありて今(イマ)ハ
ようと(マヽ)ゐ(マヽ)中の校(カウ)本(ホン)ようやく(マヽ)ありて今(イマ)ようと(マヽ)ある
部(ブ)ハ仁治(ニンヂ)本(ホン)のうつし(マヽ)なるべし
なりとのほりて(マヽ)これを頂戴(チヤウダイ)ありて今(イマ)ハ
これ校(カウ)の部(ブ)のすゝ(マヽ)むるまゝ(マヽ)に
てまゐ(マヽ)らせなどのよう(マヽ)なるべし元禄(ゲンロク)の豊宴(トヨノアヘ)ハ朝(テウ)儀(ギ)ハ利(リ)史(シ)の歌
よ利史(リシ)ハ岡(ヲカ)の宿禰(スクネ)なれどもうたハ延(エン)喜(キ)の豊宴(トヨノアヘ)ハ菅原(スガハラ)氏(シ)なるべし
へうようおくのくまりに似(ニ)る祢(ネ)しく

釋日本紀

二十八巻 十五冊 卜部懐賢(ヤスカタ)

日本紀(ニホンギ)ハ私(ワタクシ)ニ疏(ソ)ス洗晒(センサイ)ナリ後(ノチ)ニ古(イニシヘ)ヲ洗(アラ)ヒ
あまり(マヽ)ありて今(イマ)世(ヨ)ニ伝(ツタ)ハる事(コト)ハ多(オホ)く私記(シキ)風(フウ)ニ記(シル)ス

況あやまることうり○此一部の中大同小異ハあれども人道実経云ふ同
拾要ハ一条拾政事ハ仮名ニ同ふうあれども実経云ふの男ふして
都督ハ雅言ふし○此書の作者ト部懐賢ハ拾遺誌流抄等
此の時の人ふり正安年中ト部兼永考同す

日本紀纂疏　二巻　藤原兼良公

漢文ふて注せふまふり自序ハ日本紀纂疏ふあれども水代そ
のふせよ伝ふまふり巻首自序の次ふ此書の綱領ふあげて
書紀ふ対するの説ふる舊説ふ会人説ふ安麻呂等
のふ乃ふ此書拾着ふ附ふ注釈せふ事ハ水ふふる事
なふ説ふあらまふり　卜部

日本書紀通證　三十五巻　谷川士清

古今諸家の説ふの説漢文ふて注釈せふ事ハ水ふふる事
書ふして説中の誤字のふ腐字教のふところふ改ふ
事ハ水ふふるふの説ふりの事ハ蒙古十九條附録篇
会人親王傳　諸國史等　等ふ考ふところふ
卅公卷神武紀ふり卅二巻ふり卅七巻まふ神代紀
伊弉諾神宮の右ふ先達の考ふところふ
ふり中巻　此書延享戊辰の年士清ハ松阪の人ふ卜略

三十一巻

日本書紀註釋　水本

作者いまふ詳ふふず今都下假ふて注せり中略同ふところの
説ハ忌部正通　大小氏族氏　重遠　延佳　宗固　益軒　梅園氏
光海　鈎命　叫喜　松雲　兼方　桂菴ふ

書紀集解　十巻　河村秀根

此書も漢文ふて注せり巻首ふ総論八條あり中略此集解ふ

刊するところ神代紀より卅十六巻武烈紀まで
日本書紀或問 私考 写本 二巻 多田義俊
神武巻 一巻
日本書紀第二の巻なり別刻の本世に行る
神武紀集解 二巻 龍渓迂
續日本紀 四十巻 二十本
日本後紀 写本 二十巻 十本
桓武帝延暦元年より仁明帝承和十年までの十巻ハ甲本
より抄し来るものにして未十巻ハ近世刊行の活字本
史本の左紀より編出せるものゝごとく 上下冊
日本後紀纂 写本 一巻
はじめ抄紀の全書いまだ失せざりし時抄写せしものと

て綱書の大抵を考みるによりあり
日本後紀缺本 八巻
弘仁八年より承和十年まで廿七年二十四巻の内二巻欠
八年より承和十年まで廿三年の左右近衛大将藤原朝臣等
奉勅撰とあるを以て知るべし江都塙検校の門人稲山行教京
師にて校正して頼襄国史日本紀畧本の活字本
紀すこの書ハ六国史の一にて国俗鵜相国の纂輯とも
なづけひろく世に行れたるをさうずる人もとよりこの日本後紀二十巻ハ流布して
うの文政年間知るものすくなくまゝ書写せし頼襄国史考ふるに抄紀のごく全文と写して最も

検校保己一識　中器　此年寛政十二年塙検校の家に刻す

続日本後紀

文徳實録

平維章云文徳実録今の刊本誤字脱文多し一書二巻を以て
脩字の脱文あり未考天皇前帝の下に天皇帝一代の歴法及
あげてうち絶字の春秋世有二かくのごとく乱あり是れ世乱
字世の字の誤りて春秋ハ天皇のをさめたまへバ世有二と

今刊本ハ松下見林校正し興隆寺僧敬国史
及諸書ヲ補ひうち校正し典籍敬国史
ありうて校正し典籍敬国史
補ひうち校正し典籍敬国史

賀茂真淵翁の古事記を校正し一日
本紀を訳すに日本紀ハ上古の教書ハ漢文にせしかども
傍士紀ハ皆清人の口ぶりにて漢文ハ泥まれバ
上古の事実ハ遠くうつりて古事記ハ上古の風を
且国語をうしなひ上古の風をうしなひ
察すべきものなり

古事記傳　十八巻　本居宣長

舊版不揮約すること十七冊中の上巻と中巻とを合せて一冊とし流布す　十冊

舊事紀　十巻　五本

鷺頭舊事紀　十巻　五本

出口延佳校正の本と　下略

鷺頭古事記　三巻　右二同

舊事紀偽撰考　写本　一巻　多田義俊

舊事紀の偽なることを論ずる物十ヶ條と云て神代巻の部分のみ

高保十六年於華洛春塘亭秋田多田兵部源義俊書とあり　上略

二紀辨　写本　一巻　同上

日本紀四書紀古事記三書の考証なり

先代舊事本紀　一名大成經　七十二巻　七十四本

舊版不揮約すること古事記の部分と同じ

もて四分の一ほどに減ず

舊事本紀玉鉾百首　一冊

舊事本紀の部分を抜きて和歌を詠ずるもの

舊事本紀玉鉾百首　一冊

舊版不揮約すること古事記の部分と同じ

もて四分の一ほどに減ず

舊事本紀玉鉾百首　一冊

舊事本紀の部分を抜きて和歌を詠ずるもの

中の巻の別あり　舊神教經　三巻　宗徳修平四十巻神教經の一冊延宝年

の同撰と称て物覚の一部なり　秦河勝の序と偽作せり　今全本

なるべし　○舊事大略　同書全部の抜

萃にて物覚の一部なり　古くよりある写本なり

もと一冊ありしを二冊に分ちしものなり　津田氏蔵　一冊

ひとまきをけり　標はいかなる標をけりしか　今もとの標

職ハ淳仁(ジュン)拝る職といふもそこを桓武帝の御門の名
とり来ていひそめてこゝろとてこゝろ又さま〴〵
あるを遠尾(ヲヤ)の遠の字をこの何とし訓ける又多く遠代此の
字の義と同ゆるもの宗教の伝授し室生寺の門代と実
紀にあり又隋の世こと七十二巻とふ仏教の社扨校挙すべう
ざるう我俊いう

類聚國史 写本　二百巻　菅贈大政大臣

寛平五年菅原道実公勅して修撰せたまふ上古日本
紀より下代実録にいたる六国史の中より歌或
は詔勅二百巻ばかりなり今世に伝れり今全部ふ
あるまゝなく巻数をあつめたるものゝ
さだめ古写本をもとめ校定まりぐ〳〵もてく

本朝世紀 写本　三十巻　信西法師

此書の撰著信西法師がお納言通憲のうち〳〵寛治一代の国史な
ゝり此書ふ海ゝうてゝう〇按ずるに六国史以
外ふ仏て世に
なるふ附け世紀ゆゑ
世紀ふ寿代の事ふ
ゆゑまでゝきこゝろ
写もてなりの四十六巻ゆゑ
十四ふ本朝世紀残編一巻ふ収む今平維章の
扶桑略記 写本　十四巻

今井似閑ノ萬葉緯小ニ云ク扶桑略記本朝書籍目録ニ云ク
阿閇帝皇國初メテ（中略）今案ズルニ国史略記ノ残篇ト称
スルコト終ニ十巻ト云ヘリ今案ズルニ皇國ノ初ヨリ人日本紀略ト称スル本アリ疑ラクハ一
條ノ誤ナラン今文勢ヲ考ルニ扶桑略記ノ扶桑略記ヲ
云ヘルノ如ク扶桑略記ノ同ク扶桑略記ヲ云ヘルノ如ク
葬儀ノ前傳拾遺ニ向ケ扶桑略記ハ空海ノ事跡ヲ大切ノ日記ヨリ
皇帝ヲ比較大キノ字ヲ以テ之レヲ注記ス人
名ノ如シ扶桑略記ノ作者ハ空海ヲ敬ヒ
空ヨリ之レヲ皇國ノ他ニ向ケ多クハ傍ニシテ扶桑略記ヲ
キ世ノ皇帝ヲ云ヘルモノノ如シ○平維章和享年ニ

扶桑略記ハ二通アルヲ本朝月令ニ引ク所ノ扶桑略記ハ
日本紀略 写本
古書目ニ日本紀略二巻ノ本ヲ以テ十一巻ノ本ヲ以テセヨリ
ノ二ナリ○平維章曰日本紀略ハ光孝天皇ヨリ朱雀
ニテ止ルヲ以テ世ニ行ハルヽ本ハ宇多天皇ノ末ヲ添ヘテ延喜
帝ヨリ用ヰラレタル日本ノ九代実録ヲ以テ
史トスルノ意ヲ以テ名ヅケタルヲ
本朝通鑑 写本

二百七十三巻

神武天皇ヨリ後陽成天皇ノ慶長十六年ニ至ル迄ノ我国ノ歴代
没後ノ諡号ノ国史實録ノ役ニ林信勝ノ序（漢文）アリ本朝ノ史ハ
我曽祖羅山先生撰ニシテ台意ヲ以テ編輯スルトコロナリ
神武天皇ヨリ宇多ノ天皇ニ至ル寛文年中ニ頭注鵞峰先生再ヒ

上略 正保年中我曾祖羅山先生 公命を受て本朝の史を撰す
いまだ編を終ずして故有て止寛文年中我祖鵞峰先生又
公命を受て前を編すところの書を補ひ名を賜ふて 本朝通鑑
とふ今人の書纪ところの事を編すること百年に至るまで四拾巻を明白なり
本朝の史を補ふといふ一段なり國史實録を撰す
いまだなりずして止家君これを補ひて漸く緒に就き一葉ゝ編
をなして以て七十巻を全ふす去年の林檎より今茲の大築に至て
全く其編を終勤なりといふべし旦門生一両輩次第も相代てこれ
細書やゝ成の後其一本ハすれども次て大父を賜ひ其一本ハ
則以て小子たまふ嗚呼小子側に侍して 本朝事跡の大略と知
ことを得るの幸ふり旦此書をなすふりの一幸ふり次て

命を受て史館と忠岡とに置其志を継ふの事を撰つゝ上
古より聖代の初より下後陽成の御宇に終る其前録に併て序く
本朝通鑑の号と賜ふ而有條代の皇王と挙ること二千百年の暦運
と會すること〇同書確軒林恕の序ふ正保年中我曾祖羅山
先生 命を受て本朝の史を撰すること編を終ずして故有
て止寛文年中我祖鵞峰先生又 命を受て前を編する外の
書を補ふ名を賜ふ 本朝通鑑とふふこと 下略

本朝通鑑提要 写本

神武天皇より後陽成天皇の慶長十五年に到る歳未三百廿提
要三十巻ハ男憲門生野節坂部を以て本書を據て纂ふ仍有き
要仍撰して編を終ること十年庚戌の夏弘文院学士林恕

笥より藏めて卿千金を享(アツ)まん悦びずや　元禄十六祀昭陽
協洽建寅之月確軒林恕書　上下大略

大日本史　写本　二百四十六巻　西山公御撰

神武天皇より後小松天皇まで本紀七十巻　公武諸臣の列
傳と史漢の體に擬ひもたまふ其中に神功皇后攝政
攸之大友皇子は帝紀に載三種神器の吉野にうつりたまふ
まで南朝は正統となす　此公の評攻めり巻首に
享保二年二月従二位行大学頭菅原朝臣信篤の序　正治五年十月
按中納言従二位源朝臣の序　享保五年十月従二位行権
中納言源朝臣の序あり　次に
修史例二十五條を挙○泄書本紀七十二巻列傳一百七十巻序
目録二巻惣計二百四十六巻となす

第一巻より　第七十二巻まで仁徳帝を本紀七十二巻となす
第七十四巻より　第八十巻まで后妃列傳十二巻となす
第八十六巻より　第九十九巻まで皇子列傳十四巻となす
第一百巻より　第一百五巻まで仁皇女列傳六巻となす
第一百六巻より　第一百七十八巻まで仁諸臣列傳七十三巻となす
第一百七十九巻より　第一百八十六巻まで仁将軍列傳八巻となす
　将軍八源朝臣頼朝より足利義満までとなす
第一百八十七巻より　第一百九十一巻まで仁将軍家族列傳五巻となす
第一百九十二巻より　第二百十三巻まで仁将軍家臣列傳廿二巻となす
第二百十四巻より　第二百十八巻まで仁文学列傳五巻となす
第二百十九巻より　第二百二十二巻まで仁歌人列傳四巻となす
第二百二十三巻を孝子列傳一巻となす

第二百二十四卷ヨリ義烈列傳一卷ニ終ル
第二百二十五卷ヨリ烈女列傳一卷ニ終ル
第二百二十六卷ヨリ隱逸列傳一卷ニ終ル
第二百二十七卷ヨリ方伎列傳一卷ニ終ル
第二百二十八卷ヨリ第二百三十卷マデ叛臣列傳三卷ニ終ル
第二百三十一卷ヨリ逆臣列傳一卷ニ終ル
第二百三十二卷ヨリ第二百四十二卷マデ外國列傳十二卷ニ終ル

外國ハ　隋　唐　五代　吳越　宋　遼　金　蒙古　明
新羅　高句麗　高麗　百濟　任那　靺鞨　渤海　蝦夷
粛愼　吐火羅　舍衛　南天竺　林邑　崑崙等ナリ

修史例ノ古ヘ元正史ノ文ヲ侍ノ根據スルトコロ勢ヒテ舊ヲ
遵ヒテ輒ク改ノ削ルヿヲ得ス本紀ヲ神武ヨリ持統ニ至ルマデヲ今ク日

本紀ト稱シ續日本紀ヨリ國史日本紀ト稱シ實錄等ノ史ヲ參ヘ取
ルノ方ヲ所ヲ注ス今ク正史ヲ用ヒ成ルノヲ主トシ實錄ニ據ルヿ十三代
ヲ以テス而シテ一例ニ但列傳ノ例ニ從ヒ出ヲ終ス
ス是ヲ以テ拘束スルヿヲ得ス且正史ノ我ニ取ラサルトコロノ
ヲ以テ勞明據ナキノハ固ヨリ之ヲ棄ツ

補遺ヲ作ル　引用書目ヲ畧ス　通計六百七十餘部
大日本史替ハ藁（ワラ）　寫本
此書ハ日本史本紀列傳ノ未ノ附シタル贅ヲ一ニ合スルノミ
二卷

本朝通紀　五十五卷　長井定宗

定宗ハ奥州會津ノ隱士ニ元ト書編輯ノ大體ハ文公ノ通鑑綱目陳
周ノ綱鑑ノ法ニ倣ヒ似ヨウトイヘドモ書編粗同クシテ其義
大ニ異ナルヿアリ元例ヨリハ

前編 二十五巻 神武天皇甲寅の年より近衛天皇の久寿二年
までなる
後編 三十巻 後白河院の保元々年より後陽成院の天正十
八年までなる

日本春秋 写本 五十巻 僧日初

本朝日本史を拾ひて年紀を作て編集したれば人々の為には
これ不益なりと僧顕日も摽して褒貶の論皆人に汲して悪
鑑し善を勧めしむるところさりつけ山城國池田の里に住せし
第子合あれつ居し令名なる幼卿とし蜜衣雅れども何とも見
秘録口学を好て注書の草稿ハ五十巻よりかし書より世里の人客し
傳へて稀に世の人にあらくよし近年より好みて伝せりといふ

古史通 写本 五巻 源君美

本書四巻に読史凡例一巻を附す 神代より神武のころしめまで
の事の綱をとりて記す 下略

讀史餘論 写本 九巻 同上

假字日本紀 写本 三十巻

山問文神代巻 写本 二巻 賀茂真淵

日本紀第一第二の巻をひらかなにてかきかへたり 下略

神書類

神道五部書 写本 五巻

倭姫命世紀 一名太神宮本紀 天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座
次第記 一名阿波良波記 豊受皇太神宮御鎮座本紀 一名飛鳥本紀
伊勢二所皇太神御鎮座傳記 一名太田傳記 造伊勢二所太神宮宝
基本紀 已上五部度會の建住諸書を引異本を改考へて述ぶ

神道十二部書 写本 十二巻
倭姫世紀 御鎮座本紀 御鎮座傳記 宝基本紀
天冥書 古老口實傳 御奉仕記 御鎮座本紀 機殿規
式帳 心御柱記 神鳳鈔 以上十二部、以禁河の書と号して
倭姫命世紀抄 写本 二巻 秦信慶
葬水草 写本 一巻
神道五部書抄 写本 六巻
五部書説辨 写本 十二巻 源幸和
太神宮儀式帳 写本 二巻
太神宮心御柱記 一巻
神宮實録 写本 一巻
神別記 写本 十巻
天書紀 写本 十巻 一本
古語拾遺 一巻 齋部廣成
古語拾遺言餘抄 五巻 龍尚舎
古語拾遺句解 二巻
句解ハ宮馬の友舜延州卷の左玉令社記ハ松下見林
唯一神道名法要集 二巻
神道深秘 二巻 卜部兼直
神道大意 一巻 卜部兼倶
神道大意 一巻
神道秘説 写本 一巻

神懷録	写本	一巻
類聚神祇本源	写本	十五巻
元三集		八巻
東家秘傳	写本	一巻
廿一社記	写本	一巻
神風和記	写本	三巻
舊事玄義	写本	十巻
自從抄	写本	一巻
古老口實傳		一巻
宝鏡開始	写本	一巻
神祇秘抄	写本	三巻
神祇拾遺	写本	一巻

	慶會家行	
	北畠親房卿	
	同上	
	同上	
	僧慈遍	
	同上	
	山崎宝加	

諸神記	写本	二巻
十種神宝圖	写本	一巻
十種神宝問目	写本	二巻
湖璉集	写本	八巻
神道集	写本	一巻
大裏神道	写本	六巻
両部神道口決鈔		五巻
両部神道口訣心鏡録		六巻
神道八重垣傳		二巻
神道名目類聚抄		一巻
陽復記		
神宮秘傳問答	写本	

	非佛智公の云々り弘法大師の作とふ
	源慶安
	僧鳳潭
	藤齊定
	出口延佳
	同上

古今神學類聚鈔　百卷　真野時綱
神國決疑編　三卷　玄賢
神風記　五卷　足田以正
神家常談　三卷　真野時綱
本朝神社考　六卷　林道春
神社考詳節　一卷　同上
神社啓蒙　八卷　白井宗因

序例或問體質一卷あり古社記ども諸國の名神大社の由緒を捜索しかり諸書に考校しく其の本末を發明したるまでは大概捜索しかり諸書に考校しく其中攝州別格官幣の内坂越浦にある守屋の大臣の祠に考出し一羅山の祝詞よりは遥に古く式世より遥に古きハ其不明の條多しいま近世の云傳(イヒツタヘ)說(カイ)據(ヨリ)ども宗因代く

一說流の區(アラソ)ひ或人の疑ふ處ども或人の說又或人の疑ひぬるまでも悉く書文の說白井宗因という人を神社祕蒙中に採用ひ玄賢という人を神代卷も實ふるの神社考よりまさるの適(カナ)ふ所ありはばかりいと家の說ありやすくこれるものなどの時に釋しもあるべきを生れめば大よそ實說ぞうべく天下の水

神社便覽　一卷　同上
春日權現驗記　寫本　二十卷　五本
春日神社記　改正　寫本　三卷
日吉社神道密記　寫本　一卷
住吉　秘記　寫本　一卷

八幡宮本紀　二巻　巨妙子
巻之一　仲哀天皇紀　巻二三神功皇后紀上下　巻四　應神天皇紀
七巻　貝原好古
巻五　仁徳天皇紀　巻之六　惠迪篇　孝謙天皇朝代より貞永の
比まで、備前の神威のいちじるきを、ことごとく考へてこれをあつむ。附録一巻は、社の本主を
さぐり、諸家系譜の異説附す　上下帙　芝山院芳内府定誠公序　菊信序　自序　松下見林序

太子流神秘巻　写本　一巻

巻首に一相大悟四民の一切叙成就叙の図あり。奥書に云
右太子流の軍要八明賢(ミヤウケン)と云人結て思一義理を得ふ
共容甲斐の坊正成と得てつゐに南朝を立ん北朝をして
開者八此軍秘なり百日精をこらして先哲の中より一子

相伝の神也他人得ること勿れ云々とあり。正成死の後ハ此巻秘すべし共云々。
これ必ず秘して神すべし。

墨江紀畧　写本　一巻

寛保四年九月新春府於会陽城下写之　慶安
一巻相伝の次第を書(右太子流の軍書都合四十九巻也中二相大根
川士清奥書あり)

備前神體勸請巻　写本　一巻
備家養目口傳　写本　九巻
興名草前後編　写本　一巻　浅井重遠
玉籤集　写本　八巻十本　玉木正英
原根録　写本　三巻　同上

宗廟社稷答問 写本 二巻 源幸和
喪葬記 写本 一巻
神儒問答 写本 一巻
　宝鳩巣神道仮設ヲ識スル書ヲ駁シテ遊佐好生ノ駁ヲ好生駁巣ノ
　文ヲ駁シテ答書ヲ駁駁ヲ下略
和學通 写本 二巻 留守友信
　神道儒道一帰シテ不妥ヲ論ジ又近世神道ノ正統ヲ述ル人ハ山崎闇斎一人ノミト
　説ク神乃伝ヲ学ビ弘ム才明有博学実造ノ上都家忌部家ノ
　伝ヲ参ス人ヲ集メテ両説ヲ比較シ之ヲ教習ス今
　ノ難説ヲ主トシテ集メテ大成シ上神人ノ油光ヲ受ケ
　下世代ノ正統ノ伝ヲ要ムル者ノ為ニ著ス外世ヨリ後ノ著ハル吉川惟足
　會津中將君臣問答 一冊 君ハ山崎氏ヨリ伝ヘ臣ハ吉川氏ヨリ伝ヘ下略
　靈の枚極民部大輔ヨリ白木向ヘ山伝答ノ一人ニ伊勢流ハ私
　下見板本添本年ノ非ヲ述ヘ号スルノ書中助山崎流ノ一流ヨ
　書未葉(イサヽ)爾関東ハ師部光海岡田盤斎外ヨリ挽別ヨ山家流
　元ノ多ヒヲ神書ヲ以テ証定ス日本制作文字ノ
　和訓ノ多ヒヲ神書ヲ以テ証ス
神璽辨 写本 一巻 多田義俊
神拝恐惶釈 写本 一巻 同上
劍璽辨 写本 一巻 同上
葵祭記 写本 一巻 同上
直宇辨 写本 一巻 同上
三種神器辨書 写本 一巻 同上

神明憑心談　二巻　同上
獣肉論　写本　一巻　同上
神道辨惑　二巻　特宝院聖應
神京問答　写本　一巻　大江吉利
天祖都城辨々　一巻　本居宣長
神代口訣　五巻　忌部正通
日本紀神代抄　十一巻五本
日本書紀神代合解　十二巻
神代講述抄　五巻　山本廣足
神代評註　四巻　龍惣近
神代紀上秘解　写本　十五巻　源雅亂
神代巻風俗抄　写本　五巻　秦信慶

神代巻副義箋　写本　二巻　高屋近文
日本書紀三元巻　四巻　横山當永
日本紀三元巻鈔解　写本　八巻　同上
神代巻藻鹽草　五巻　玉木正英
神武巻藻鹽草　一巻　同上
神代小嚢草　写本　十七巻
日本書紀神代巻統節　写本　五巻
神代巻風葉集　写本　十巻　山崎垂加
未書改多く引てそろそろ
神代巻私語草　写本　二巻
神代巻日蔭草　写本　一巻　岡田正利
神代巻鹽土傳　五巻　谷重遠

日本紀神代卷口義　十卷　多田義俊
神代卷秘要抄　二十卷　同上
神代卷磬(ケヅ)華山蔭　一卷　本居宣長
神代正語　三卷　同上
中臣祓　一卷
中臣祓抄　二卷
中臣祓考索　一卷　和田宗允
中臣祓瑞穗抄　二卷　出口延良
中臣祓纂言　一卷　宮木春意
中臣祓白雲抄　二卷　白井宗因
中臣祓風水草　一卷　山崎無加
中臣祓風水草管窺　一卷　玉木正英

中臣祓諸葉草　二卷　浅利太賢
中臣祓大全　十卷　藤原永弘
六根祓松風釗　一卷　同上
中臣祓松風釗　一卷　松崎義克
中臣祓古義　三卷　多田義俊
中臣祓氣吹(イブキ)抄　三卷　宮城春意
六根清淨大祓淺說　一卷　源安範
大祓辨　五卷　賀茂真淵
祝詞辨　三卷　同上
祝詞考　二卷　本居宣長
大祓詞後釋　二卷　同上
出雲國造神壽後釋

雜史類

水鏡	三卷	中山内府忠親公
水鏡異本	三卷	
大鏡	八卷	藤原為業
增鏡	十卷	一条冬良公
栄花物語	四十一卷	
栄花物語抜萃	九卷	
續世継	十卷	

六代抔一條院の万寿二年より
いつまで百四十餘年のの成敗
世継物語 一卷或ハ五
抄書ハ文字法文病と物語と
保元物語 二卷 葉室大納言時長
平治物語 三卷 同上
参考保元物語 九卷
参考平治物語 六卷
保建大記 二卷 栗山愿
保建大記打聞 三卷 谷重遠
源平盛衰記 四十八卷
平家物語 十二卷
平家物語長門本写本 十六卷或十二卷
平家物語嵯峨本 十二卷

彼らいふある文抜ハ心角藏赤壁の花筵うてき刻版嵯峨
の角板よあるを以て嵯峨本と稱す 中略 奥書のうち此年家

物語者中院前中納言以諸家正本一校合之給者也

平家物語抄　二十四巻

東鑑　五十二巻

東鑑抜漏　一巻

愚管抄　写本　七巻　慈鎮和尚

初ハ皇帝年代記ヨリ始テ神武ヨリ高倉ノ御代マデノ君臣ノ事ヲ記シ
くだりて中ニ承久ノ乱ヨリ東鑑ニ
なりぬれバ天下ノ沙汰ノ事ハ東鑑ニ
参考して意ヲ以テ記シ申ス三位ノ中将実朝ノ薨ノ以後ハ
かくまでうちつづく実ニ傍若ノ記録ニ入ルヒきこもの
しるの巻首ニ並ニ皇帝ノ目録アリこれハ扶桑拾葉集ノ
なるべし神代ヨリ始テ神武天皇ノ

次ハ百王ノ末ニ至マデ小ノ心ヲ
保元ノ乱ヨリ末ノ世ノ様ヲ
人ノ死ヌルヲ歎ヤウケナ
しづかさ以ノ心ヲ
給れバ保元ノ乱ヨリ末ノ世ノ
ヲ以テ中ヲ
やまりて
やすく
つけ給ヘリ
さてハ保元ノ乱ヨリ末ノ世ノ
重久乱ノ起マデヲ以テ

永久記	二卷	
保暦間記	二卷	
神皇正統記	六卷	北畠親房
續神皇正統記	一卷	
櫻雲記 寫本	三卷	
南朝紀傳 寫本	四卷	
梅松論 寫本	一卷	梅松論ハ南方紀ト南北二朝書ト稱ス
伯耆卷 寫本	三卷	
船上記 寫本	一卷	
吉野拾遺	四卷	
太平記	四十一卷	
參考太平記	六十四卷	

明德記	三卷	
應永記 寫本	一卷	一名大内義弘退治記ト号ス
嘉吉記	一卷	
椿葉記 寫本	二卷	道欽親王
應仁記	一卷 七本	
宂太記	二卷	
鎌倉大草子 寫本	一卷	一条兼良公
神明鏡	七卷	林春齋
文明一統記	七卷	鵜飼石齋
日本王代一覽	四卷	
本朝編年小史		
本朝歷史略評註		

和漢合運圖　四巻
和漢編年支合図　一巻
皇帝年代記　写本　一巻　慈鎮和尚
　愚管抄のごとし附すべきものすけたり
年代記　一巻
如是院年代記　写本　六巻　神武天皇元年より正親町院元亀元年まで
　奥書に云右如是院年代記以林祭酒藏本校合畢
和漢年契　一巻　高祖
掌中和漢年契　一巻
　右尋書一覧一之巻除(ノゾク)序月日凡例一九百八葉(ページ)天保三壬辰冬閏十月廿六日夜於燈下杉(スキカキスル)写之　中村萬善直道

群書一覧巻之二
記録類
禮儀類典　写本　五百十巻　西山公御撰
古今諸家記録百部の中朝庭の神儀よりつづくる公類聚せしを各々ひ別し一冊一巻に仕立せしもの(ト)年山打受取りと呼しは写し畢りし日用書留のこと)
第一巻より第二百十四巻までその間　内侍所御神樂
第二百十五巻より第四百八十四巻までその間　年中行事
祈雨　止雨　臨時御八講　御譲位　御即位　大嘗會
八十島祭　行幸　遷幸　遷宮　御元服　御讀書始　立后
御産　女御入内　改元　天文密奏　講書　諸宣旨　任大臣
上表　御幸　御葬深　拝賀　著陣　春日詣　両禄　追討
使　配流　御國忌　其餘恒例臨時の故実号(ナヅ)くるのせり

杉録

第四百八十五巻より第四百八十九巻まで　詩御會
第四百九十巻より　第四百九十六巻まで　歌御會
第四百九十七巻より第五百十巻まで　音樂　宴遊　御賀
諒闇等のもの載る

群記類鑑　写本　八十巻
日次記　写本　二百二十巻
村上天皇の御時より近來摂家代々の記録と九条道長公より兼実公までこれ収載せらる　一巻
諸家名記　写本　兼明親王
李部王記類聚抄　写本　二巻　九條師輔公
九暦　写本
或九記と号す九條左大臣の記録なり今の本上下二冊あり天暦九年より記せり　二十五巻　左大臣高明公
西宮記　写本
西宮左大臣の記録なり十六巻の西宮抄とは異なり禁中恒例臨時の作法等を記せり　十五巻　藤原行成卿
権記　写本
行成公宮中大内裏等の儀式故実を記せる事正暦より長保三年正月より記せり　五巻
道長公記　写本
御堂関白道長公の記録なり一條院寛弘二年正月より一條院長和二年までの記　四十七巻　右大臣實資公
小右記　写本
此小野宮右大臣の記録なり同く小右記と号す一名野府記と号す一条小野宮右府の字をとりたるもの又續水心記と号するは祖父

小野文書以實秋の記錄水心記と号す
以て其字の偏をとりて名づけしものなり
春記 写本
春宮亮資房卿の記にて春記と号す又野房記とも号す
の長暦四年より権記の永承三年までの分記せり
経信卿記 写本
大納言経信卿記と号す左宰相師通公の
治暦四年より堀河院の寛治三年までの分記せり
水左記 写本
土御門左大臣の記錄源姓なり
承保四年より 應徳三年まで

七巻
前参議資房卿
七巻
源俊房公
七巻
左宰相師通公の記錄
白川院の寛治七年六月より堀河院の應徳三年七月まで
中右記 写本
中右の記錄
崇徳院の保延元年十月まで
七十二巻 藤原宗忠公
中右の記錄に同じ中右記と号す堀河院の寛治元年六月より
古き也今世に流布する本は闕文多し○按書法の
故実の考証にもっぱら多く此書を以とす
の分なり次て書す

六巻

二巻
園屋関白記 写本
関白兼経公の記錄なり権一条院の長元三年より記せり
水日記 写本
十二巻 権大夫師時卿
皇后宮権亮時仲の記錄なり羽流の天永二年四月より崇徳院の保延三年まで

永昌記 写本
一名宰記 号予卷首 永昌御記為隆卿 十二卷 参議為隆卿
の長治二年より紫徳院の大治二年まで二十五年のの記録なり 巻頭に掲ぐ
八條相國記 写本 一巻 八條実行公
右大臣同の卷首とおぼしきも今存せざるところ 残缺ありて大治元年
十月の事一条なり
長秋記 写本 十卷 皇后宮権大夫師時卿
后宮の唐名を以て長秋宮といふ 下略
三長記 写本 九卷 大納言長兼卿
二條長兼卿の記錄 同卿の三長記と号す 嘉禄元年より
七年三月の事以記せり
殿記 写本 八卷 藤原良経公

或ハ殿脱と号す種々の部類とあり
禅閤の記華族當家相傳記のうち 殿下記とあるも
台記 写本 四卷 関白家實公
猪隈関白記 写本 二十卷 宇治関白頼長公
猪隈或ハ猪熊と称す土御門の建仁元年より承元二年までの記録なり
台記別記 写本 八卷 七本 同上
右記とおぼしきものの中より摘の抄出せるものにて日記
のまとまりたるものとは別なり
人車記 写本 二十五卷 兵部卿信範卿

此書一の兵範記と号す宮と名づけ一宮づけたるもの
人車の号ハ実名の偏をとれり信範公の納言入道と稱す
吉記 写本 二十二巻 吉田権中納言経房卿
巻首と吉御記とあり 第一巻の初承安三年七月の記より巻の
多ハ廷尉三年十月九日書う 按察使親長とも
愚昧記 写本 四巻 三條左大臣實房公
残缺ことて六條院の仁安二年三月のみと記す
玉海 写本 二十八巻 月輪摂政兼實公
此記そのハ玉葉と号すれ其後普光園按察良基公あらし
めて玉海のふとき一部
玉葉抄 写本 一巻 おほの殿とも申すものゝ
玉藻 写本 二十九巻 光明峯寺摂政道家公

土御門院の承元二年より四條院の仁治二年有ようところく闕巻ありて嘉書抄出入ようなり
明月記 写本 九十六巻 京極中納言定家卿
初の名ハ照光記といひ明月記ともあるハ往昔の
毎月記なり其後久の江絵巻の時冷月明ようと異の
霊夢を感じ改しまうて家風ようまうて明月記第一
ときて作るの月のハ色てふ〳〵ひらくと〳〵の世を称のる
百練抄 写本 一巻
此ハ平家のおこりより後鳥羽院の御代建久九年までの
事ようまうて往古のおもむきを知るの一助なり
明月記和歌部類 写本
巻首の歌道事ようまうて往記の中の和歌をあつめるものなり

佛御閑兼良公の抱出し給ひそのまゝ文書の図々どもしめてはさみこんである 下巻

山槐記 写本 十巻 藤原忠親公

又達幸記ともいふ 又貴嶺記ともいふ

保年令殿の上のつぼねの名ゆゑ此名ありといふ

平戸記 写本 十巻 平経高卿

民部卿経高卿の記録なり民部卿の唐名なり卿といふ故て平戸記名付く

霞院の延應二年三月より康元元年まで有るを記す

仁部記 写本 五巻 権中納言資宣卿

日野資宣公の記録なり毎日厨の上役申候を記す

建長八年より弘安二年の迄谷残缺あり 此記も資宣公八資実公の孫

管見記 写本 五巻 竹林院左大臣公衡公

公衡公は西園寺家の大祖実兼公の男にて従一位左大臣准后に至る

按ずるに此記は公衡公の男にて従一位左大臣准后に至る 従一位左大臣公衡公の外祖

萬一記 写本 一巻 大納言宣房卿

萬里小路一位宣房卿の記録なり第一部と号す此記を始る

而残欠多し 下略

吉続記 写本 二十三巻 吉田大納言経長卿

経長卿の記録吉田内大臣定房公迄纂せしものなり

三槐荒 写本 二巻

槐記ともいふ 何人の記すところなるや未詳

系図をみるに上下巻にて

公清公記 写本 一巻 内大臣公清公

これも残欠の書にて公清公を始め実春公の男にて延文元年薨す 号後野々宮殿下

園太暦 写本　三十三巻　太政大臣公賢公

一名園太記と号す中園太政大臣公賢公の記録なるをもてかく名付らる南朝の比の記録にして朝家の事ハさらなり盗賊の濫行のことなどすべてさまざまの記録のことを記せる中に兼好法師の履歴なれどもつまびらかなり

後愚昧記　五巻　後押小路内大臣公忠公

応安四年正月より同七年九月にいたる　異本

後深心院関白記 写本　七巻　関白道嗣公

後光厳院の応安二年より永和五年までの記録

薩戒記 写本　二十巻　中山大納言定親卿

称光院の応永二十五年正月より後花園院永享九年十二月にいたる　下略

康富記 写本　二十巻　権大外記中原康富

応永より享禄までのことを記せり但二十巻も残缺あり　下略

宣胤卿記 写本　二十三巻　大納言宣胤卿

文明長享延徳明応文亀のことを記す○此書中文明十二年十月二十日より十二月十四日まで禁裏にて兼倶卿日本紀を講読せられしことのあり

そのさまをもつまびらかに記せり

二水記 写本　十巻　鷲尾中納言隆康卿

又一止記と号す後柏原院の文亀四年よりのことをしるせり

元長卿記 写本　十巻　甘露寺大納言元長卿

後柏原院の永正二年より大永五年までのことを記せり

三光院内府記 写本　一巻　西三條實澄公

綸旨の事勅書のこと女房奉書のこと装束色目のこと烏帽子のこと束帯のこと元服のこと其外種々のことを記す　下略

百錬鈔 写本　十七巻

此書の記有いまだつまびらかならず仮記して十七巻と定めよう正元より建武に至る下四巻

有職類

金玉掌中抄 写本　一巻　中原章任

律の正書なり罪科事ようの五刑のるに至る七十一條をのく律令ならびに律疏ならびに今案従来ここにあり○本朝法令の書もつて唐の刑書の用ようて律令格式の四科あるに至るまで贈答不法等事ども律令格式ならびに諸家の記録ならびに公家の記録ならびに大宝律ならびに大宝令ならびに弘仁格式ならびに貞観儀式ならびに延喜式ならびに内裏式ならびに交替式ならびに唐律と令とくに同じきものこれを

名例第一　衛禁第二　戸婚第四
廐庫第五　擅興第六　賊盗第七　闘訟第八
詐偽第九　雑律第十　捕亡第十一　断獄第十二

按ずるに律の正書と書いうは義解集解跡附釋問答ホそれらの諸家の書をいうなり多くは七巻にて備えずまた令は

職制第三

十巻　清原夏野等撰

令義解

今の本書は大宝元年の贈右大臣藤原朝臣不比等卿の撰せらるるところなり大宝令はいまだ全くは伝わらずこれ仮養老令をもって補えりといえども養老令もまた散逸して今の本書は唐令の開元令に損益して編せるものなり

唐令の目録と唐六典ようてくわしく今の義解は雑大宝令の注釈にして有職家至要の書なり此書裏野総蔵ぬれども多くは小野篁のまの写

…ことの次第を記した文書
以上捺印者三人ずつその月番が
東宮職員令 家令職員令
第三 田令 賦役令 学令
禄令 第五 宮衛令 軍防令 第六 儀制令 衣服令 営繕令
第七 公式令 第八 倉庫令 廐牧令 医疾令 第九
假寧令 喪葬令 関市令 捕亡令 第十 獄令 雑令
今の刊本慶安三年蓬生巷林鵞峰序あると誤字(ママ)なりとして校正す
令集解 写本 三十七巻 惟宗直本
注釈義解よりぬきあつめすこぶる詳しくかつ多し
古書の引證多く集解に依る
令私考 写本 五巻

…修撰なり第一巻の中宮職令より職員令の軍團まで注あり
令三解 一巻 荷田在満
今の令八大宝令よりこの令解に至るまでこれが制するふあるいはさらにこの後に制すべきを未だ定まらざるの故なり
類聚三代格 写本 三十二巻 欠缺六巻
禁中代の下給佛ふうけいあり 弘仁負額延長の三代の格式にもとづき類聚せる三代格ふうし弘仁負額を…
三代格 写本 四十巻 今本十二巻
弘仁式 写本 二十巻 今本十巻 (欠字あり)
貞観式 写本 五十巻 藤原時平等奉勅撰
延喜式

朝延年中の儀式百余條の作法を詳に記せり 下略

延喜式神名帳　十巻　五本

延喜式五十巻のうちそのゆ十巻神祇式祝詞を載するのみ 以下倣之

儀式　写本　十巻

内裏式　写本　三巻

弘仁年中安倍安則勅を奉じて撰ぶ所の儀式を記せり

法曹類林　写本　三百三十巻　残欠二本　藤原通憲

法曹至要抄　三巻　坂上兼明

法海の名匠の民宗公時平公ほか撰ぶ所の律令格式の中より法家の至要抜ひ出せるもの 下略

裁判至要抄　写本　一巻　坂上明基

裁判の事三十二條仗条 天平弘仁の格令律を引合せるもの 下略

政事要略　写本　百三十巻　残欠九巻　惟宗允亮

仁和寺書目の政事要略百三十巻至要條時雑事等惟宗允亮とあるもの今存するところ僅かに九巻のみ　第廿八　第廿九　第五十三　第五十四　第六十　第六十一　第八十一　第八十四　又一巻く次阙　上下畧

西宮抄　写本　十六巻　左大臣高明公

高明公西宮左大臣と稱せられし書抄にて恒例臨時のこと年中儀式の書にして古礼とのせたり仁和寺書目には西宮抄四巻八巻十巻とのみ有るより巻数定まりがたきことなり

北山抄　写本　十一巻　大納言公任

此書は一條院以来の儀式をあつめ江次第は誤りの等あり北山抄は證書なりと称華菓もかくこそ 下畧

江家次第　二十一巻十九本　大江匡房

年中恒例臨時の政事亦小の儀式等をつまびらかに記す第十六の巻脱漏せり故に十七の巻を以て一巻ふくろにして二十一巻とす今の刊本第十六の巻を以て第十六の巻とす

禁秘抄　三巻　順徳院御撰

諸禁中の故実をつまびらかに記す後鳥羽院御時二巻ありしを後人更に上下二巻とす

弘安禮節　一巻

弘安禮節異本　写本

侍中群要　写本

橘広相等の侍臣の故実の故事を記す

賀茂祭秘抄　写本

藏人所のる故実を記す

内局在礎抄　写本　二巻　菅原和長

巻首に大内記菅原朝臣和長抄とあり大内記の補せらるる人の心得すべきる故記せり

傳宣草　写本　三巻

口宣と宣旨の草案をあつめ

拾芥抄　六巻

巻上　外記部　巻中　内記部
巻下　下辨官部　内　摂官雑事

左大臣実憑公

簾中抄 写本 二巻
拾芥抄(以下欠)(そうみ)(ける古)(さし)并寺の(あれ)(ちの)(ほう)
(もつて)(資隆)(ハ)(條あ)(ゝ)(ほう)(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)(ゝ)
十七箇條憲法 一巻 聖徳太子
行基式目 写本 一巻
貞永式目 一巻 御成敗式目と号す
御成敗式目諺解 六巻冊本 清三位入道宗九
御成敗式目鈔 写本 一巻 作者不詳
公事根元 一巻 一条禅閤兼良公
公事根元集釋 三巻 松下見林
(な)(文)の(傍)(引)(諸)(書)(等)(法)(書)(成)(ぬ)(れ)(と)(称)(す)(老)(有)(ら)(兼)(良)(こ)(の)
小侍(を)(附)(し)(一)(公)(の)(著)(述)(の)(書)(目)(を)(記)(す)(文)(正)(七)(年)(六)(月)(自)(跋)(あ)(り)

年中行事 一巻
東宮年中行事 写本 一巻
神祇宮年中行事 写本 一巻
建武年中行事 写本 三巻
建武年中行事略解 五巻 一名假名年中行事
禁裏年中行事 写本 一巻 谷村光義
日中行事 写本 一巻 (古代の年中行事をその(ま)(ゝ)(の)(条)(文)(あ)(り)
大樹秘抄 写本 一巻 後醍醐帝 御製
九條殿(へ)(御ざ)(ゝ)(ま)(し)(ゝ)意見の書(ぶみ) 写本 一巻 九條伊通公
禁掖秘抄 写本 一巻
名目鈔 一巻
制度通 十三巻 伊藤長胤

禁秘御抄 寫本 三卷
御即位假名抄 寫本 一卷
後西院御即位記 寫本 一卷
永享二年大嘗會記 寫本 一卷
永和大嘗會記 寫本 二卷
大嘗會私記 寫本 一卷
元文大祀記 寫本 一卷
御昇壇記 寫本 一卷
北山行幸記 寫本 一卷
永享行幸記 寫本 一卷

類聚雜要抄 寫本 四卷
此書諸具器物殿屋等ごとくぐ圖説ありて一本巻末に内府子黒棚の圖説ありくさ〳〵ある巻の書なり一本巻末に内府子黒棚の圖説ありて一本巻末に内府子黒棚の圖説ありて
附すれ人の附會し刪るべし 上田氏
有職小説 三巻 駒谷散人郁
故實秘要抄 寫本 二巻 垂井義知
昔傳拾葉 寫本 五巻 同上
昔傳拾葉提要 寫本 一巻 同上

條を陳ぶるもの一巻ありて巻末に寛永六年中夏安記とあり

故實叢要 写本 四巻 多田義俊

三十箇條故實辨 写本 一巻 同上

職原鈔 二巻 北畠親房

作者の説によれば北畠准后源親房南朝村上天皇の興國二年吉野より奉りて編集せる一巻の文書とせられ考ぐるに筆記ものゝ如き名字をもつけたる法令家の人心推度の自説あり官職唐名以下一條稽古兼良公の作りて附加せる跡ありまた略年表ともいふべき兼良公の加筆し慶長十年出羽大蔵を輔中原職忠そのほか舟橋式部権清原秀賢阪上明親などの加筆ありて校訂せる本なり○或説によれば民族統治帝と称せられる帝王の政事の要領を簡潔に記せる書なりと○秀賢の門生にて記せる職の名称を人心職志法名

華菴中心と稱す華菴秀澄より就て校正す一云中院也足軒の朱校ありて参考に供せり○或説によれば民族統治帝と称せられる帝王の政事の要領を簡潔に記せる書なりと○秀賢の門生にて記せる職の名称を人心職志法名

成名乃成職といふ才能のある人物のほう職名を外記と称しくらもと共ひとしき安保氏泰長と伝へて今も連綿する○壺井義知氏同じく職事と職掌物語あり官位相当の説もありて名けたるものの不合理なるやうと云ふ官位相当とあるやうと云ふ説は唐宋の職源にありて其説とあげてその職掌と職事と職掌とのせりて只任道

職原闻書抄　写本　五巻
職原勘物　写本　六巻
職原鈔大全　十巻
職原鈔首書　五巻　藤原肅
職原鈔句解　十二巻六本　白井宗因
職原鈔参考　五巻
職原鈔闻書　十二巻　幸菴分宜
職原鈔通考　写本　二十一巻

和書二十巻　職国考　一巻　以上享保十七年十月刊
今国義後裏字南云云亦有職者流之号すものの教訓家ゆり
其説或は補伸家の作なる歟もし或は依拠ある
抔て故実説多し抔先生も悔く学び訪ふ処にて其

の旨と相違の上方よりつぐなるものゝみそを参考の用に供
云々等ふらつきの有やもあれ抔孫愛文をおて謙辞ありを
おもざれ心得と無知さる人説文なるこ多しをそこまもていひ
のでうそれ職原抄よなづみてこうもこ一書成るべくぞ○藤貞幹が
好古小録に職原鈔かく記ちなく巻首のたゞ百官の二字あるのみ抔猥
抔補をの一定注釈明職云云鈔等のみも近一般よあるべくだ○抔ずる抔楊雲記巻中の日本国王
吉野と帝都を号ふ等の事歴闕ちく月日を云々傑の昇進降官抔断紙
ともすれば二月下旬源教方卿野(都)ちる百官記注職掌(ツカサベ)抔ぐ〳〵未だ主て帝都の亀鑑て
云つぐ〳〵教方博識才学あり今東国ちて文書の一巻もあらて
転くこれ以抔〳〵ちすに凡人の所作よりぐぎ

砌（ミギリ）を踏（フム）て学術を研（ミガ）く故実（コジツ）に熟（ジュク）する人（ヒト）これを尋（タヅ）ぬて交（マジハ）りを先生（センセイ）を師（シ）として拠（ヨ）るべきを択（エラ）ぶ三年（サンネン）二帯（ニタイ）して初（ハジメ）て要束（エウソク）拾葉（シフエフ）二十巻（ニンクワン）あり（ヲリ）て梓（アヅサ）に鋟（キザ）む四方（シハウ）の学者（ガクシャ）我（ワガ）ひりこれを称（ショウ）す

予（ワレ）嘗（カツ）て事（コト）あり（ヲリ）て三年（サンネン）余（アマ）り先生（センセイ）の門（モン）に閉（トヂ）て問（トヒ）着（ツケ）ず居（キョ）仮（カリ）に移（ウツ）るや七（シチ）たび（タビ）職原鈔（シキゲンセウ）の講（カウ）説（セツ）を聞（キ）て意（イ）の向（ムカ）ふ所（トコロ）を得（エ）たり（タリ）

西園寺（サイオンジ）の公（キミ）より此（コノ）先生（センセイ）の学（ガク）を称（ショウ）する事（コト）を聞（キ）て其（ソノ）人（ヒト）を徴（メ）し給（タマ）ふ時（トキ）に適（タマ）たま〻（〻）病（ヤマヒ）を得（エ）て果（ハタ）さず

八條羽林（ハチジョウウリン）君（キミ）温故（オンコ）の二字（ニジ）を扁（ヘン）して学（ガク）を勧（スヽ）めんことを請（コ）ふ

百巻（ヒヤククワン）一（イツ）も無（ナ）きものは非（アラ）ず

もの三十余人（サンジフヨニン）実（ジツ）に七人（シチニン）一（イツ）たび職原鈔（シキゲンセウ）の講説（カウセツ）を聞（キ）て意（イ）の当（アタ）る処（トコロ）あり

て世（ヨ）の先生（センセイ）と称（ショウ）するもの当（アタ）れり

ほゞ（ホヾ）

仁（ジン）風（フウ）門（モン）仙（セン）宮（キュウ）のごときは（ハ）

ほゞ（ホヾ）

東都（トウト）の学（ガク）も亦（マタ）遥（ハルカ）に

より（ヨリ）開（ヒラ）けんことを

合（ガツ）綱義（ヨシツナ）藏（クラ）氏（シ）名（ナ）は民房（タミフサ）其（ソノ）才（サイ）実（ジツ）に先生（センセイ）の子

なる者（モノ）実（ジツ）に有（ユウ）職（ショク）の学（ガク）先（マヅ）は（ハ）中興（チウコウ）すといふべし

先生（センセイ）よりさきにすでに先生（センセイ）のあるを

鮮（スクナ）し雅（ミヤビ）意（イ）規矩（キク）あり

嗟呼（アヽ）先生（センセイ）の思義（シギ）後（ノチ）の学（ガク）の

鶴（ツル）を

ほゞ（ホヾ）

職原（シキゲン）の二字（ニジ）を釈（シャク）して云（イフ）義（ギ）知（シ）らず此書（コノショ）なんて

するハ旧名（キウメイ）のつゞ（ツヾ）き忍（シノ）ぶより

宮（ミヤ）を称（ショウ）す又書（マタカキ）に職源（シキゲン）あり

如（ゴト）くにして

若（モ）くハ

職原鈔（シキゲンセウ）講（カウ）

自筆（ジヒツ）本（ホン）

二十巻（ニンクワン）

多田義俊（タダヨシトシ）

右（ミギ）職原鈔（シキゲンセウ）上下二冊（ジヤウゲニサツ）は寛延元年（クワンエンガンネン）より日（ヒ）夜（ヤ）筆（フデ）記（キ）せし者（モノ）にて延

三年有半を以て其初を遂げ、後進の依て倣ふ所となる。別に小宮井先生の伝を録したるあり。茲に贅せず。

みぎり、初て書塾をあつるなり。始は一ツ橋通ぬけ、御門の北側、今の小川町の地にて、杭をうつ。

事を始め、次に御書籍を写すほどなりしが、

ども、追々に門人増加し、文化三年、神田

○巻高の職事創業の頃及書籍

職業創二郎右衛門より一部八冊書籍小野

子孫より一部八冊、製方並の孫教員の

ことこれを取続き教員となりたるた

び毎々別の枝葉ありて取続

ども、おのおの追々百年あまりで用ひられ、取続なきのみでなく、京都書林も二十年ごろより次第に衰微して、取続て繁昌する者は、今の世に於ては、ほとんど稀なるべし。文化の頃は、古文を用ひる者多くして、今の如く仮名まじりの文章は、甚だ少なかりしなり。

繁昌して栄行ものゝ、共門人平田小野篁園横木玉井などは、人に勧めて編講させ、世を益する私の述作をもなさしめ、官職の学問に志す者は、皆此塾に入門して、其業を卒へ、官職に就たる者多し。

茅堂依頼により、小宮井先生の伝を記すべきの命を受けたれども、予が文拙にして、理窟先生参考八宇都宮由的職原鈔聞書にて、林春齋の述作なる書ありて、これら皆官職の学問に益ありしもの四巻ありて、立野春節という人の抄したるもの二冊あり。右の内、中古職次の私意を以て、取捨一なる故、今もちひて記しぬ。古職

の才子平田外記も才子河内の人壺井義知なの学を見ざり舊記故
徴し俗本の誤脱魯魚を校合して正し四方の門徒に教授するより官
職の学大に開けて古へよりもその多し壺井氏の功亦大ならずや是ニ至つてハ是て
ソれも壺井氏文字の学なき人なりし故異朝の舊例を引に至つてハ是を
すして誤りすくなからず日本の官職ハ周官唐官二ツの官を引くとて定
されバ解しがたし周官ハ周礼より唐官ハ唐書百官志に出るへから
周礼百官志の言ふ勘へてハ任官の故実ところよく通じがたし唐書の全
篇を考ふる時ハ其人の称號によつて任官の次第も自ら通ず是の外ハ杜佑
通典なども是レ官職の事みゆる也都十部ありこれらハ考へ合せ
されバすべからず但し大全参考の下く異国代々の官を引て論ずる時ハ
ところめぐく本邦の時ひろし唐の令ざれバ周考かずし之れ日本の官
職を異国の官職に考へ合す法也○又令大全参考以下の説ニ此書ハ

親房公和州芳野にて撰するところ也壺井氏の説ハ常陸国小田
の城にて撰て是を作し其時用し神皇正統記も撰し芳野南朝の
天子後村上天皇へ献上の書なりといふ壺井氏ニ下巻に親房の自著の跋ニ
其文に在遊旅不当一巻文書ニ云々さる遊旅ハ芳野を離れて遊旅の
天子の召ひのつの旅へ出たまふ義と史漢などを引て論じ又曰人の
撰するところ正統記ハ芳野ハ険しき所なれども三種の神器ましませバ
まことの都なるよしつてさうらへバなんでよその代々まで遊旅と出たまハ
んや常陸の小田の城にて撰し是の事ハ後村上帝興国二年庚申二月下
旬の事なるよし何る軍書に見てさうらふ 以上壺井氏著す職原鈔辨疑聞
書の御返し秀樹 是下巻の跋を論ずるところなりけれバ
其後の叙編に武衛闕官位昇進之次第ニと書かして其文續にかなふ
跋云て是遊旅によく一巻の書物も書き終し畢ぬの詞依頼より

百寮訓要鈔
只利政治將軍の心得をも引用せられもつとも実際なるものゝされど幸井家の説なり
一巻　二条良基公

有職問答
要書を云此一冊問答良政隆朝臣御所望之条答西園寺通
按実俊公記にくわしく細字にそくわしく記されるか哉

諸家一業
官家の官職のみ抄したるさもあるべし
一巻　二条康道公

官職難義　字六
東宮　摂政　関白　内覧　兵杖　准后　親王　太后　叙位
一巻

の文書〳〵みある軍書まで見てこゝろといふ詮抔もかうし世又
南朝紀傳と号し一南朝のことをかく傳のやうなるものを南方
紀傳と称するも同出こしは事よ幸井氏の説のごくさう抔もで
かう抔もそこもとそこ〳〵一昔し程房博覧の人かあらず学者てけハ
職原鈔の文字の類例銘置とも可ならんや大意幸職抔をて
我と心して書なるへし一定旅の字とこゝろえて字
て延紙し書たまふまつ〳〵芳野の吉水院といふまつ今と改を吉
野宇と号す一昔幸小親房自筆幸橋の職原鈔もつ先年関東(七
てまて今抔方ぶよりしかし写ほんが昔よりいひ
伝あつ抔写一さる例て幸井氏の判抔ぬるの抔もるべしこの
那智抔ずる小職原鈔奥国二年二月下旬常陸国小田の城そ能

内侍宣　重任　其外官家の故実ならびに
有職ども多くこれを記す　元亀八年自筆本右書写奥書あり

釋家官現記　写本　一巻　尊圓親王

僧家の官位のことを記す　毫井龍雨の自序並に跋文あり　寛文四年勅修を経て浄土宗に施行せらるゝ旨見ゆ

公卿補任　写本　百巻　或八十巻

堂書寮勘文　一冊　写本

慶長の比までの公卿補任の勘文を集む　一部重複あり

南朝公卿補任　写本　四巻

吉野皇居の延元二年より元中九年までの補任を記せり　以下略

位署書式　写本　二巻

官位姓名等を書列する法式を記す　位署の部門に載巻末に毫井義知の跋あり

官職浮説或問　写本　一巻　毫井義知

官職の名目つまびらかならざる由にて浮説多き巻なり　これを疑ひて或問に答へたるもの

雑職九毛傳　写本　一巻

官位相当表　雑職の部　毫井義知

當時諸家官位昇進次第　写本　一巻　毫井義知

諸家より官位昇進の分限を記せり　以下略

百官表圖　一鋪　近藤篤

日本宮制沿革圖 寫本 二卷 伊藤長胤

東涯翁先小漢土の宮制沿革圖作りて歷代宮位變革の次第を考へ今又此書を作りて本朝宮制の古今を比較し（以圖作說明）

雲圖抄 寫本 二卷 藤原朝陰

此書は幸中公の雲紫の指圖にて上卷は四月より十一月までその後は十二月より翌年の四月まで內侍所神樂の事 五節 石清水臨時祭 賀茂臨時祭 春日祭 吉田祭等の次第を記せり（下略）

雅亮裝束抄 寫本 三卷

一名假名裝束抄とも云古制を考へたるものなり

飾抄 寫本 三卷 土御門大納言通方卿

女官飾抄 寫本 一卷

衣飾書 寫本 三卷

桃華蘂葉 寫本 一卷

三條裝束抄 寫本 一卷

校正裝束拾要抄 二卷

唯心院裝束抄 寫本 一卷

裝束圖式 二卷

束帶着用次第 寫本 一卷

物具裝束鈔 寫本 一卷

裝束地紋圖 寫本 一卷

裝束雜事抄 寫本 一卷

裝束秘記 寫本 一卷

雲上衣紋集 写本 一巻
四位五位装束略抄 写本 一巻
車服制度手記 写本 三巻
源君美野宮定基ノ車服ノ制度其條故実ヲ問ヒ答ヘタル返答ノ書
衣文愚童訓 写本 一巻 壺井義知
装束文飾推談抄 写本 一巻 同上
装束問答 写本 一巻
鄙鶴問答 写本 一巻
奥書ニ云ク右一冊之書并先生（因ノ門人依尋問答書之中略備用之書写早以金市ヲ遣ス者也 速水房常又之ヲ写記ス云々）
冠帽辨 写本 一巻 上田光秋

氏族類

新撰姓氏録 六巻 萬多親王
聖徳太子傳暦 一名平氏太子傳 一巻二本 平基親
假名太子傳 十巻
太子傳暦備講 三十巻十五本 釋了意
王造小舟壮喪書 一巻
菅家御傳記 写本 一巻
菅家聖廟傳暦 二巻 菜原梅性
菅神渡唐記 一巻 沙門師嵩
太宰府天満宮故實 二巻 貝原篤信
菅神傳 写本 一巻 菊池武雅
両聖記 写本 一巻 藤原長親卿

南都と高野と安楽律とを兼学して後京の天邪の僧のもとで学び明恵の弟子となり記した法集を収めもの
明恵上人傳記　二巻
明恵上人遺訓　一巻
親鸞聖人傳繪　二巻　覚如上人
圓光大師繪詞傳　四十八巻
柿本人丸事跡考　一巻　竺常
西行物語　二巻
高藤公傳　一巻
夢窓録　三巻
徳生傳　一名兼好略傳　一巻

慶長行狀　写本　一巻　佐川田昌俊
元亨釋書　三十巻　十五本　沙門師錬
元亨釋書備考　三十巻　十六本
元亨釋書和解　二十三巻　惠空
扶桑禅林僧宝傳　十巻　高泉和尚
東國高僧傳　十巻　同上
日本天台先德記　一巻　定珍
日本書詞列祖行業記　一巻　融懶禅師
勅撰作者部類　写本　三巻
古今集より新千載集までの作者の官位世系及びうまくの集かつらまでの作者をあげつらう　上味　二巻
續作者部類　写本　二巻

新拾遺和歌集 六巻 撰者なし
頭傳明名録 写本 十巻 箕山 呑舟軒
諸家系圖 道卷 本朝皇胤紹運録 十四巻
第一巻のみ編纂本朝尊卑分脈圖 特進亜槐藤
公定撰とありて 清和天皇より
大系圖 一 三十巻 西道智
巻首に新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類とあり此書は清
華中京等の西氏道智集編す人見氏の跋あり洞院公定の撰
尊分脈すべて諸家於系圖、故に仍て偽多の誤を後の
ありて此用ひて考索すべし
源平系圖 一巻
藤原系圖 一巻
武家系圖 二巻
本朝武家評林大系圖 五巻
将軍家譜 七巻
百将傳 二巻 林道春
日本百将傳鈔 六巻 同上
諸家傳 三巻一本 林春齋
諸家知譜拙記 五巻
此書原本諸家伝略と号して奉行千貫等の法性務民定代
物にて拵たるものなりそうな此四十年ばかり世の行わ
るる系譜多くは何人の手と云ふ編にて利欲千金文匠等の人に託んと
するが如く紙数凡二十冊年此の内の人を載ぜしめて金銀校
合訪ひ語らひ一先達の宿住記一覧帳の年月年数

本朝通史　二卷　林春德
扶桑隱逸傳　三卷　沙門元政
本朝孝子傳　三卷　藤井懶齋
假名本朝孝子傳　三卷　七本
大倭二十四孝　二十四卷　十二本
本朝列女傳　十卷　黒澤弘忠

劉向列女傳の前半をとりて倭文にしたるもの　関氏孝節録の前文を省て寛文年中雲田守松平出羽守の家臣黒沢弘忠編輯す　紫宸后妃傳　夫人傳　孺人傳　姉妹傳　處女傳　奇女傳　神女傳　未と云て孝霊帝のほどより今代までの婦人を載たり　岡史傳記の抜書と云て源平盛衰記太平記等より善悪の事をとりあつめたり　善商道慶　静軒一行等

等のせをとりて抜書にしたるもの　此書に元来序跋のなきゆえ書名をも知ることあたはず　延享二年乙丑仲春京師書肆某梓行　東水房常校也　東水房常校也　奥井寛斎の門人ならん　○高板延享二年の条まで記して後の事を補ひ入れたるものなり　延享二年乙丑仲春印行　その後補ひ入れし事ども注す　以下略

連雲録　写本　一卷

百人代播成稜より百十四代東山院まで天子親王皇子皇女の御連系をしるす　附録受禅即位行幸譲国宣下立坊雑事得度転任配流帰洛等の年月日をつぶさに注す　以下略

日本古今人物志　七卷　宇都宮由的
諸家人物志　二卷一本　池永豹

字書類

倭名類聚鈔

天地　歳時　忌神　人倫　形體　術藝　職官　國郡　居處　舟車
牛馬　宝貨　香藥　燈火　布帛　裝束　調度　飲食　稲穀　菓蓏
羽族　毛群　雑介　虫豸　草木　等の部ゆゑりてこりくく倭名
はこゝ一文字の出處と辨色立成　楊氏漢語抄　倭名本草　皇統私記
其餘數十部の書をひきこれを考へ（こゝもと）の南中よし長源院公主の
教令と當りて仰選すゝ一巻にて上天地より奉中人物を次で下草木よ
り動静にて二十巻と成巻中小部をもち部中に門をもち門部二百
六十八門とせり。或人の説に第四公主いまだ親王ならずして大日本史よ
り内親王のおよび和名鈔二十巻と著すとも記すものなり。其後の序に略す

十二巻　今本一巻　僧昌住

新撰字鏡

假名列女傳　八巻　北村季吟
本朝女鑑　十二巻　了意
本朝名臣言行録　二巻一本　梅澤庸
度長沢の筆ゆゑ言ひ仮漢文のてにをはもうりの仮名ところ
多く武野燭談　落穂集　古今記　十日記　真清確言記　發句記
智囊　花芳記　嚴秘録　駿雲雑話　寛延奇談　木の書のせも他校先
の侭ふるところをれいと輯録すべきかの如し
近世畸人傳　五巻　伴高蹊
續近世畸人傳　五巻　同上

平他字類抄 写本 四巻
和注切韻 一巻
海蔵略韻 十巻 今本二巻 虎関禅師
下学集

真草下学集 二巻
増補下学集 六巻 山脇道圓
節用集 写本 二巻 林宗二
節用集活字本 二巻
節用集印刻饅頭屋本 一巻
伊京集 写本 一巻
書言字考 二十巻 槙島昭武
多識篇 五巻 林道春

羅浮游猟彬多識篇 写本 一巻 同上
倭爾雅 八巻九本 貝原好古
日本釋名 五巻 貝原篤信
東雅 写本 二十巻十本 源君美
天文 歳時 地輿 神祇 人倫 宮室 器用 飲食 製蔬 果蓏
草木 樹竹 禽鳥 畜獣 鱗介 虫豸 等の部をもうちてその名の
釋すべきを以て解す〻〻さるのみ於てもまたすべて
義そのごとく明らかならざるものを收め載ること或は
出典を以てし或は古の語を以て相まして
その由来を注すこの書の編輯するところ
倭名類聚鈔にふたしところあれども
同文通考 四巻 同上

俤楷正訛	一巻	太宰純
漢字和訓	八巻二本	井澤長秀
勅撰和訓 字本	十巻三本	
和訓類林	七巻	
和訓栞前編	十三巻十冊	谷川士清
以呂波字考録	二巻	僧全長
以呂波聲母傳 字本	一巻	多田義俊
以呂波訓義 字本	一巻	同上
本語口傳 字本	一巻	同上
語意考	一巻	賀茂真淵
假名文字遣	一巻	行阿
類字假名遣	七巻	荒木田盛徴

和字解	一巻	貝原篤信
和字正濫鈔	五巻	沖門契沖
和字通例書	二巻	同上
古今假字格	八巻	橘成員
書心抄	四巻	同上
假名字例	二巻	荻門文雄
和字大観抄	一巻	楫取魚彦
古言梯	一巻	本居宣長
字音假字用格	一巻	同上
漢字三音考	一巻	上田錬齋
靈語通		

契沖の和字正濫抄成りてより和字正濫要略を作るまで

往來類

明衡往來　三卷　藤原明衡
一名明衡消息又雲州往來と号す　乃咏
新猿樂記　写本　一卷　同上
此書往來ともありまた文體ともなづくる如くにて收しる所の者ども書ける人（男女）名ども（けうとのく）
西の京の厩とかやの事ども（武士侍医者）
吾妻相撲（すまひ）とて一ト渡り終（をは）りし後（のち）の事ども（ネイト）
商人相撲ともてそろひ産業職分ともの名ども（ヨロヅヤ）
まで書ありてそれに根據のあるものをもとめそもそもの雲別法
本ありてそれ〴〵の風俗をうつしたるものゝ
庭訓往來　二卷　玄恵法印
庭訓往來抄　三卷　作者不詳（作者不詳ながらも信ずるに足る）

庭訓往來註解　五卷　永井如飛
十二月往來　一卷
尺素往來　二卷　藤原兼良公
裳求膚鷹往來　写本　一卷　松田宗岑
新撰類聚往來　三卷　冊峰和尚
武家往來　三卷　四本
貞德文集　二卷

法帖類

本朝名公墨寶　三卷
三國筆海全書　二十卷
集古法帖　路薩真幸正心文　五帖

和韓名苑　三卷　滕孔采
銅燈臺銘　一帖
東塔露盤銅柱銘　一帖
威奈卿墓誌銅器銘　一帖
安幾破起帖　一帖
三藐院閔白臨定家卿書　二帖
海陽泉帖　一帖
撫子合　一帖
道澄寺鐘銘　一帖
神護寺鐘銘　一帖
長谷寺緣起　一帖
大安寺緣起　一帖

行書心經　一帖
琵琶行　一帖
藥師寺塔銘　一帖
大應國師塔銘　一帖
多賀城碑　一葉
九品文　一帖
伊豆內親王御願文　一帖
三十六歌仙　一帖
源判官櫻樹禁榜　一帖
文館詞林　一帖
勸善院鐘銘　一帖
七德帖　一帖

那須國造碑	一帖
世尊寺法帖	八帖
以呂波	
端祥齋帖	一葉
栄手公墓誌	一帖
鎌倉右大臣和歌	一葉
益田池碑銘	一葉
辨慶消息	一帖
賜珠光口宣	一葉
藤原信綱懷紙	一葉
定家卿消息	一葉
頼朝卿消息	一葉
聖一國師消息	一帖
宮才人帖	一帖
手ヒ磨利帖	一帖
恩命帖	一帖
寂證度牒	一帖
白詩二首	一帖
國姓爺尺牘	二帖
大江匡範詩	一帖
賣茶翁詩	一葉
頼朝卿消息	一帖
領書	一帖

平相国書

三十番歌合　一帖　後頼朝臣書
和歌三十首　一帖　将軍実朝公書
春江帖　一帖　親王公卿等集書
方袍帖　一帖　弘法大師書
春江帖　一帖　諸名筆集書
詩一首　一葉　佐理卿書
和歌三首　一葉　京極黄門書
和歌七首　一葉　同上
和歌一首　一葉　西園寺実衡公書
和歌一首　一葉　近衛信尹公書
書牘　一葉　黄門心宗卿書
光明遍照中字　一葉　弘法大師書

忍字　一葉　同上
大字　二葉　小野道風書
和文　一葉　西行法師書
詩歌三首　一葉　近衛信尹公書
兵書　一葉　法眼晃一書
連珠画讃　一葉　釋即非書
書牘　一葉　大石良雄　原元辰書

右天保三壬辰年冬十有一月廿日抄録之　中村有一道

本書
墨書一覧巻之二百二十五葉

群書一覧巻之三

物語類

竹取物語　二巻　小山儀

　此物語の作者知れず書目の源頼と云るも仮名に明証なし

二十巻　三十本

竹取物語抄

宇津保物語

源氏物語　二十二巻　源氏の作者紫式部

　同人の河海抄とあり一条院の時の事を記す

藏びらき　四帖　上下　樓のうへ　四帖　上下　菊のえん　二帖　上下

花宴乃巻　一帖　たまかつら　一帖

吹上　二帖　上下　蛍の巻　一帖　胡蝶の巻　二帖　上中下

梅枝并竹河之一帖　初秋　二帖　上下　夜寒　二帖　上下

あてそや　一帖　五帖　上中下

書目のかんがへ　云　源氏河海抄の名なれどその条なく近年刊行せる古注室長と云のみにて作者の姓名をしるさず

ありその浜名なれどそれも未考

まろそ云　云　次第不同

第一　桐壺　第二　並　箒木巻

第四　帚木の巻　一名雨夜の品定

第六　吹上の上　第七　吹上の下　第八　蛍の巻

第九　蛍の宮　第十　あて文　第十一　初秋　一名とこなつの巻

第十二　たづのむら　第十三　藏びらき上　第十四　藏びらき中

第十五　藏びらき下　第十六　梅の上の上　第十七　梅の上の下

第十八　巻名なし　第十九　巻名なし　第二十　巻名なし

かのでくて今もて二十巻そうそろて叶ふ

宇津保物語俊蔭巻　三巻

別当あつさ二巻のなかのことてそうつほ物ごうの名称とありてつくもあ
きてしさ本のものもこてよ源氏絵合のさよふけうの
おきれうのほのうらびの巻ありてぬるやふの巻
をそろりを利ふくるなり　四巻

濱松中納言物語　写本

作者つまひらかならず古写本二巻ありてうしと
中納言左遷ありて物語ありてうしと
うるが俗ごうてるて伝物ごうふつもう　中略　伴善雄
すみよの名ありて今世てふ
るものにて小一條院のいうりとありてそのさもいて
ありくいねどもし世ものやうとものとも

二巻

伊勢物語

此物語作者の事古来より伊勢の事
どう伝説よりて古書ども
説伝の書ども引て業平と物語の事
真字伊勢物語
萬本伊勢物語

二巻　或ハ四巻ニ作ル
三巻

源氏物語

作者紫式部ありて源氏絵合の巻ありてつくもあ
きてしさ本のものもこてよ源氏絵合の巻ありてつくもあ
おきれうのほのうらびの巻ありてぬるやふの巻
をそろりを利ふくるなり　四巻

濱松中納言物語　写本

作者つまひらかならず古写本二巻ありてうしと
中納言左遷ありて物語ありてうしと
うるが俗ごうてるて伝物ごうふつもう　中略　伴善雄
すみよの名ありて今世てふ
るものにて小一條院のいうりとありてそのさもいて
ありくいねどもし世ものやうとものとも

二巻

伊勢物語

此物語作者の事古来より伊勢の事
どう伝説よりて古書ども
説伝の書ども引て業平と物語の事
真字伊勢物語
萬本伊勢物語

二巻　或ハ四巻ニ作ル
三巻

伊勢物語髄脳 写本 五巻
伊勢物語抄 写本 一巻 二本
伊勢物語忍見抄 二巻
伊勢物語宗祇抄 五巻
伊勢物語惟清抄 写本 一巻
伊勢物語肖聞抄 写本 二巻
伊勢物語聞疑抄 五巻
伊勢物語難義註 写本 一巻
伊勢物語初冠 五巻
伊勢物語集註 十二巻
伊勢物語勅講抄 写本 二巻
伊勢物語拾穂抄 二巻 五本

伊勢物語 十巻
一條兼良公 宗祇法師
舟橋宗尤
釋宵柏
細川幽齋
加藤槃齋
一華堂切臨
明暦二年 冷泉尾院 御書
北村季吟

伊勢語聴断 写本 四巻
伊勢物語童子問 写本 十三巻
伊勢物語古意 六巻
伊勢物語章甫鈔 八巻
勢語通 写本 二巻
伊勢物語傍註 二巻
大和物語 二巻
大和物語抄 六巻
大和物語首書 五巻
落久保物語 四巻 六本

沙門契沖
荷田春満
賀茂真淵
岡山春幸
五井純祝
賀茂季鷹 校訂
北村季吟 作名ハ祥一 一華堂切臨とあり

一乃上二ハ下二ハ上二ハ下二四とあるそうずのかな字別のあちらこちらの仮名遣ひの仮名あるべきさだめ

源氏物語紫峨本　五十四巻
源氏物語繪入　六十巻
紫明抄　写本　十二巻　素寂法師
河海抄　写本　二十巻　四辻善成公
此書勘考のうちに正五位下行大学博士源惟良撰と云々これ公義成公の作名なりしかし惟光良清二人の名代りなるべし（上中下略）
源氏論義　一巻二本
仙源抄　写本　一巻　藤原長親
此書に源氏物語の新すじ引ぬきて源氏の与奪を論ぜり
源氏小鏡　二巻　同上
源氏物語系圖　一巻

おほい殿ごもりくらき年ごろやまひのさうじざまにて
よろぼうでうさう口逆書の私にむすめ中将などもなき人
ことでくおぼしあつかふさまくてよろづの物おぼえず寝
の私ざまに又一向ふるめかしうおぼしてあくがれ
いでたちそそろくしきまひしげ花のかげ
くけうある人の花のまんぐわ実権門のさかえもう
おとすまさきひしりてすのほりみつの寺仏神のほとりみち
とぶらきくものすごうぎなりといふより
尚秋風の吹ころ宮ぬし
源少保物語頭書　四巻　加茂真淵
源少保物語君本　二巻
源氏物語　五十四巻　紫式部

源氏物語系圖 寫本　一卷
源氏物語表白　一卷　安居院聖覺
源氏物語千鳥抄 寫本　二卷
花鳥餘情 寫本　二十卷　一條兼良公
花鳥餘情異本 寫本　二十卷　同上
源氏物語年立　二卷　同上
源氏和秘抄 寫本　一卷　同上
源語秘訣 寫本　一卷　宗祇法師
不審抄出 寫本　一卷　同上
篇木別註 寫本　七卷十六末　特花有拘
弄花抄 寫本　十五卷十本同上
一葉抄 寫本

細流抄 寫本　二十卷　西三条公條公
明星抄　五十五卷廿本西三条实澄公
孟津抄　二十一卷　九條禪閤植通公
林逸抄 寫本　五十四卷二十六本　林宗二
源氏紹巴抄　二十卷　里村紹巴
休閑抄 寫本　二十卷　里村昌休
花屋抄 寫本　四卷
岷江入楚 寫本　五十五卷　中院通勝卿
源義辨引抄　二十卷　一華堂切臨
源氏綱目　九卷　同上
源氏物語一部連歌可用詞　一卷 寫本
光源氏一部歌詞 寫本　一卷

源氏大概抄　一巻
源氏物語目安　七巻　三本
源氏物語引歌　一巻
萬水一露　二十八巻　六十二本　能登永閑
山路乃露　一巻
源氏雲隠　六巻
源氏雲隠抄　三巻　浅井了意
源氏外傳　写本　五巻　熊澤了介
首書源氏物語　五十六巻
湖月抄　六十巻　北村季吟
さゝめ草　写本　四巻　北村湖春
十帖源氏　十巻　立圃

おさな源氏　十巻　同上
源註拾遺　写本　八巻　紫冲河閑梨

源氏物語一部の注よハ何くれ諸抄よりあつめてあるひハわやまたるものゝ説をとりくて誤多くねハ別よき注もずいぶんよりて拾遺て名づけてる河海抄のあやまりをもとり改あげ古きものゝよきハ更科日記とりまぜてよりいひてそのみとのも其物語の或ハ其物語の或ハ名のまゝ或ハ名のまゝ或ハ物語のまゝ或ハ物語のまゝ或ハ物語のまゝ或ハ物語のまゝ或ハ物語のまゝ

紫女七論　写本　一巻　安藤為章

いくつもの七詞、才徳兼備　七事共具（ぐ）　修撰羊序　文章無雙
作者本意　一部大事　心傳説話より出ル八年山先生御恩殿貞
政教その治教を作りし時この物語紙このまれて中頃左傾
の権族なきに先考定おおきの時を法特の御世の文学風を移
鳥先哲のまたの法つくり乃伏後を以て
けるより水茶海の前を派江ちどんかけくされーがなかの下
つて新考館にて李部玉記小右記権記左経記台記玉海玉葉明月
記など近き世の二水記などまで言部あり記録ばかり故事を
ていや不審ばかりけらもとてもどくさ等の取合いばかりつくり
うとなく心の記述にてたゞくみの業故にうとれるうもの
づくりのうかく情態と物語のあるものさえなくて心海
御家物にて権もの故ぎまし　那伽ちばの名ちう事路

唐琴沖阿闍梨のうとりて万家集の不審故侍る事ども多くつゞ
けたるものゝ序よびて今案の答へしるすべくもあらず
旅行よ故侍ることもちょうどびこれらの事務故法せらるは
ずうち故侍ることのおくるよ　もうこれなりゆーとう
もそれ故なきふもうこのおとうふ今をはるえ原十七年の月
次ま春来法ちふ故和をうとうて　ひとりの招もあれてもう
さきのゆうまうこぬまーのく永
次のまもあり。万葉竹右伴資能の故ありこれない心れえま背武物大
原のまうとうそは古故法ちうとうーもく　ぎとうてもうめいく
ーほ行家のうさきうろ　とふふるばうられうつまてはおい
物故の注釈ないかずだいものを得ーて式部が日記のほり記ま考へ
くさきわセーものそのうに有益のちに其本文のくでめるおほく

源氏掌故　写本　四巻　有栖長伯
紫文蜑乃轉嚊　五巻　多賀谿酔子
源氏男女装束抄　三巻　壺井鶴翁
源氏物語歌　一巻　川上静菴
源語断錦　写本　十巻　藤原守文
雨夜物語　二巻　本居宣長
源氏物語玉の小櫛　九巻　同上
紫文要領　写本　二巻　同上
源氏年紀考　写本　一巻　同上
手枕　一巻　同上
狹衣　八巻　大貳三位

以上中井竹山雑説著述目録

そ才徒のふそろふるこまでそ
ひとそろこいとまれなるべし
なぐ源氏物を英才のみ称し
あるそれぐく或物かおもふ
ひようそろ乱多紙そろ
才徳兼備の淑女しその者
そこそ奇評確論可謂物語指南

源語詰　写本　四巻　五井紙嶺

しまつ抄一部の中よく解ぐき
の次をもつぶして訓抄くそうけ

源語栞　三巻

此書のく他有ざるそこ

河海抄　一冊　源光行　親行
紫式部物語　一巻　道遠院贈太政大臣
狭衣系圖　一巻　道遠院贈太政大臣
下紐　四巻　作者不詳　狭衣の物語
和泉式部物語　一巻　和泉式部　日記
こうつぼや　写本　四巻
作者つまびらかならず　此物語の趣向は狭衣物語
の方に不及て人物は男君女一とうに
つくひろうそてなく姫君はそれぐとほうろうの
ましやりかと覚しまふ男君はやさしものから
ひて女房たちもおもひ侍らぬ事なとくく
そぐしのうおぼつかなくやうふとくく

まくうのれうりにあらひいれおほんぐしまゐ
とのゐさやうさうまゐぼのいまこなたへとそ
女房さんおぼてうさまうりまゐりてうこ
まいれてそんりいうごのうおぼつかなく
なげくまひめ君はうちもものなはか
ずのものにおもてうされのこゝろをしらで
のこうそべたまふいでおもん人さまりくふとうさう
ふひとすうもそうてゐたうふとうさう
ねんみ吟そひきそし（なまかしこ）いと
うさまくうすくろうとうぞやとこ
ばうれけるとこと二の巻のなみ狭
衣物語写本　一巻　信實朝臣

今昔物語　三十巻　源隆國
舊本今昔物語集　寫本　廿九巻　同上
總目一巻ヲ加ヘ三十巻ニ成スベシ今部ヲ作ルニ及テ此ノ
部分ヲ以テ改ムル文章ヨロシキノ多キヲ以テ也
宇治大納言物語　三巻
此ヲ古本小世継トイフヨシ
ハヤト同文ニ栄文安倍ヲ宇治ノ
四ノ物語ニアラズ故ニ
宇治拾遺物語　十五巻
四季物語　寫本　一巻　鴨長明
歌林四季物語　十二巻四本　伊勢ノ物語ノ如キモノ

提中納言物語　寫本　十帖二巻
菅原兼輔ノ作ト云兼輔ハ勅作ノ家ノ元祖良門ノ孫右中將
利基ノ子ニ加茂川ノ堤ノ家ニ住セラレテ堤中納言
トヨバレシ故ノ題名
花桜折ル少将　コノツイデ　モミヂノ姫君　ホラゴノ
ケサウ　アフサキノ中納言　ハナダノ少将
ムグラノ門ノ蔵人ノ少将　ヨシヲカノ宰相
ヨモギノ露　ミヤマヅミ
秋夜長物語　一巻
松帆物語　寫本　一巻
大納言物語　寫本　一巻
二代后ノ部書ニアラズ書ケルモノヲ

さまざまのこと仮名つまびらかなり
女郎花物語　三巻　六冊
四条宮の女郎花の歌合集草子の類より名ある女の
四季をおりおりに中古近代の歌撰集草子の類より名ある女の
詠を実説をひろひとりて故誠ことごとくひろひとりて抜ぐるごとく
くの物実事の女の受取ようまびらかなり
巻末に筆者大貳作とあれどもうたがはし　北村季吟月堂よりの説抜書あり考ふべし
紅葉ノ物語　写本　六巻　蓮心庵主
西山物語　三巻　建涼作
吉野物語　一名本朝水滸傳　十巻九冊　同上
吉野物語續編　写本　十巻　同上

草子類

枕草子　三巻　清少納言
首八段ほどの段をまたぐちょっと清少納言の筆とうけ難し　写板翻刻
枕草子傍注　五巻　岡西惟中
一時軒惟中の作なれども本文の筆法よく判ぜり
清少納言枕草子抄　十五巻
新撰着洋句〻〻〻〻首ありて本の名矢　先達の褒矢　大意　抄者　題目
難問口訣等の段ごとに注あり　寛文三年刊行す
枕草子春曙抄　十二巻　北村季吟
巻頭より注ありて仮名の傳系は前の抄に同じ　矢本の中なる仮名ばかり略

右本文の傍解ハ傍に上ぬとあり巻末に延宝二年甲寅七月十七日
季吟真字の後跋あり　下略

枕草子装束抄　一巻　壺井義知

此書巻首に清少納言枕草紙装束撮要抄とあり　目録ハ
櫻の直衣のこと　附ゆるし下襲　狩衣　細長ホのこと　二藍のこと　香のうすものゝこと
卯花の衣のこと　附柳の衣のこと　三位の袍[illegible]のこと
六位蔵人青色袍のこと　附青白橡　麹塵　山鳩色　奥陵の号　人若極陵の許花のこと
蒲萄染のこと　あをびれすびらのこと　ひきさうぞくのこと
附あをきしろくのこと　古今冠異なること　掻練色のこと　細長汗衫かざみうへの衣大口なる
指貫のこと　表二重袍のこと　革帯のこと　附布袴あこめ　雪の下半靴とらくのこと
裙帯領巾のこと　けいしふ川のこと
右上男女の装束ことごとく諸書に引て注しあるハ義知今案をもくはへ

此書巻末に享保十四年四月門人全田敬依か字の跋あり　同年刊
行す　近来春曙抄に附して世に行ハる

ぼうく法草子　一巻　明恵上人

一名空化論といへり　下略　此奥書　烏丸光廣卿親筆の本を[illegible]

徒然草　二巻　兼好法師

此書の作者兼好法師の一条家の事は世の知る所なれど
うち精せず　此歸て関大原[illegible]正し　兼好の後ハ伊賀国
見山のかたはら田井の庄に童をもすびくはよの[illegible]往生をとげ
同き世に土肥経平か春湊浪話に[illegible]冷泉万里
小路の内裏を今の内裏と書たり　此書建武三年以後に出せしなれば
元亨の比ハ建武三年より[illegible]なり　何しも下巻に[illegible]明
[illegible]大納言といふされハ建武三年正月に大納言を補任あるべし　入なれハ此下巻ハ

建武之まで
中よ
ゆづりて
國分
元亨
延元
吉野
双の
延

まで
よしの
ども
野宮

徒然草抄

二巻　立安法印

野槌
鉄槌

十三巻　林道春

四巻　青木宗朝

これ即祖の中ぬきと
と改めて挙ぐるのみ上梓下知ありて寛文十二年四月上木す

鉄槌増補　六巻　山岡元隣

此書は浅槌の注釈にて
解する和句解或は開書文段抄等の要領をとりて添削加筆而
齋とあるは元隣の号にして寛文二年刻す一如従の跋あり

慰草　八巻　松永貞徳

もの尽しの野槌の注釈にて三部ありて二部は大意抜書
はもの長頭丸抄
これも浅間山の注釈にして長丸は貞徳の別号にて
徒然草古今大意　二巻四本
此書は本文をあげず　寿命院立安法印　夕顔（セキカラ）蒼道春法印　逍遥軒貞徳

居士三上三家の抄の評論のごとくにて序も真名にて
ものにて即祖の序なり
徒然草金槌　十二巻　西道智
此書も上の浅注の浅きものにて見るにたらず
徒然草古今抄　八巻　大和田氣（キ）求
徒然草抄　十三巻　加藤盤斎
徒然草句解　七巻　高階楊順
徒然草文段抄　八巻　北村季吟
徒然草諺解　五巻　南部宗壽
徒然草大全　十三巻　高田宗賢
徒然草新注　四巻　清水春流
徒然草参考　八巻　浄福寺惠空

徒然草直解　十巻　岡西惟中
徒然草諸抄大成　三十巻　浅香山井（アサカヤマイ）
徒然草首書　五巻
徒然草集説　十五巻　隠者冬壽
徒然草吟和抄　五巻
寂寞草（クワンセン）貫人肖像の讃　八巻　東華坊文秀
徒然草奥儀抄　六巻　高屋近文
此書兼好ひそ〳〵つたへ一部の趣を抄記しるすもの　六下署
徒然草作法秘事　一巻
徒然要草　七巻　厭求（エンゾ）人
御伽草子　二十二巻

一名江都文庫ともいふ中古の弟子ども抄著つまびらかならず

第一　文正草子　第二　鉢かづき　第三　御前草子　第四　富子島つくり
第五　唐糸草子　第六　木幡ざる狂女　第七　七草草子　第八　猿源氏草子
第九　物牛太郎　第十　さごもいし　第十一　蛤（ハマグリ）の草子　第十二　子敷盛
第十三　二十四孝　第十四　梵天國（ボン）　第十五　のせざる草子　第十六　猫の草子
第十七　浜出草子　第十八　和久式部　第十九　一寸法師　第二十　さうさい
第二十一　浦島太郎　第二十二　酒顛童子　第二十三　横笛草子　以上二十三帖（ハンドル附）

舞の本　三十六巻

中古江都の諸本よく筆写よみ取すものの二百餘なり文句多くして
おりつきこのこと出ざるもの中古の作説なども伝考ふるに益なければ
我後の三十箇條は故實雑談はしらく古歌とてとりつ

演ぜ　はるごしき　常磐問答　いろう　夢の石
新曲　敏讃嘆（ソレヤカン）　女子の望一　さゝごえ　四國落
元服曽我　小袖曽我　和田うりこ　こごゑ　住吉
未来記　木曽願書　みげ法下　馬子詠へ　笛のまき
いぶき　十番切　大職冠下　伏見とき八　堀川夜討
あつもり　まんぢう　高だち下　夜討うら　やまも大臣
文覚　笈さゞ（ヨシ）　志田　つきごよ　烏帽子折下
八嶋　以上三十六番の舞ふし

とゝく草子本　四巻　建保癸
すゞみ草　一巻　同上

千時　天保五甲午年　皐月六日抄出之

中村萬喜直道

日記類

禁式部日記　写本

此日記禁式部夫（ソト）馬佐宣孝と云ふ人の妻にて上東門院の御方の女房のよし所書に見えたり紫式部日記の外に此の日記の名のみ聞えて世に伝はらざるを今度写し得たり日記の名は書名（ヨシナ）なきより仮に名づけたるなり

禁式部日記傍註　二巻　壷井義知

おのれ幼くより真字（漢字）を読むことを好みて常に仮字（かな）ばかりの書は見ざりしかば此の日記の書名と日蔭のうつの記事とを考へ式部の一家言と云ふ一巻を著す

蜻蛉日記　八巻　石大舟道綱母

同じ物語なり

道綱の母は正四位下藤原倫寧(トモヤス)の女にして東三條攝政兼家公の室なりしかば
天暦八年の比兼家公の右兵衛佐なりし時より倫寧の女にかよひそめ給ひしより
絶えず年々贈答などありしが翌年八月に道綱は誕生なりき本妻は兼
家公の室となりたるまでを旨とし天暦八年より兼家公に初めてあひしほど
よりして道綱の誕生の事和歌等道綱童名(ワラハ)のこと天禄元年四月にして元服のこと
此書目 天暦八年至天延二年廿一ヶ年間之日記也
天延二年四月に廿年のほどまでの事をしるされたり内大臣兼家公より正和
元年中く和歌ある闕文あり 中略の付 旨記刊本写本とも傳写の誤多く且のまく
脱文衍字なども多ければ今よりさぐりてしるし契沖の校本あれども正しく校正のとゝのはざる
なのみあれば善本を得て重校すべし

かげろふ日記解環　三十七巻 十八本　坂徵(チョウ)仲文

凡例 上下 鄙言ある辨　道綱母は實に兼家公の次男なりしの辨　契沖校本のこと　文字精説の
事　かげろふの事　此并院の事釋するの事　此書日記と名づくる事　大鑑宗記批評
符合の事　女君の稱号考　諸書に異同あること　道綱の位署の事　女君の詠歌勅撰に入事 以上凡例上

料簡　泉遇(ゲンガウ)漢文　年立 源氏物語の年立にならひて道綱の成長は女君の主客にかかはりて定む
補遺 かげろふ日記のもれたる事 以上凡例下
上下 略写之

辨内侍日記 写本　二巻　辨内侍
一冊は後深草院弁内侍家集とあり 上巻は後嵯峨院の寛元四年正月廿
九日よりみの小御所にて御譲位のことより書きはじめ同年より宝治二年同年建
長と改元ありし年九月中頃までのことを書きたり 下巻は同年十月より同年四年
十月までのことを書きたり 下巻の末虫損多くして脱文あり 下略

讃岐典侍(スケ)日記 写本　二巻　讃岐典侍
上巻 堀河院御脳より崩御のことを書る 下巻 鳥羽院御即位大嘗会の事のこと
巻末脱文あり 下略

方丈記　一巻　鴨長明
長明北山に閑居せし折しるしおけるなり 安元三年四月廿七日大火 治承四年四月廿九日の大風 ごろさわぐ...などあり

日年六月遷都 紫香和の江の乱麿 天暦二まで大地震のこと詳ならざるもの
かるもの 代々のことあつめられたる記 下署

方丈記談解　二巻　作者不詳
方丈記頭書　一巻　山岡元隣
方丈記泗説　二巻　加藤盤齋
方丈記流水抄　二巻一本　槙島昭武
富士御覧記　一巻　釋宗長
　普光院義教公富士山ご覧のお伴の人この歌ども記せり
　此書一本釋西廣の序ありてやゝ詳なり
栄屋軒宗長記　一巻　同上
宗長九々記　一巻　同上

天保五甲午春正月八日

中村直道略校之

和文類

扶桑拾葉集
西山公御撰　古今の和文一言十二篇以載もれたるを扶桑拾葉集といふ
ほ西院の勅撰なり　巻首に藤部卿幸仁親王の序あり次よ　西山公
此書は　右上天皇よ進めたまふ
の家系はるゝ也たまふり

巻第一

古萬葉集序　崎峨天皇
後拾遺和歌集序　花尓通俊
新古今和歌集序　花尓良経
續古今和歌集序　花和基家
新葉和歌集序　宗良親王

二十巻　二十五本

古今和歌集序　紀貫之
千載和歌集序　花尓俊成
新勅撰和歌集序　花尓定家
風雅和歌集序　花園天皇
新後拾遺和歌集序　花尓良基

新續古今和歌集序 爲家兼良

卷第二

家の集乃内 日 家の集の内 相模

卷第三

天井川行幸和歌序 日 熊野記行 釋增基

子日行幸和歌序 平兼盛 遠江道記 日

家の集乃内 曽根好忠

儀通の神主なる和歌序 日 庚申夜奉二和歌一序 源順

天禄歌合序 源為憲 又 日

又 日

行幸二高陽院一應制和歌序 善滋為政 日吹 日

家の集の内 加茂保憲女

又 日

應詔和歌序 橘正通 枕草紙吹 清少納言

卷第四

禁式部日記 紫式部

卷第五

和泉式部日記 和泉式部

卷第六

家の集の内 爲尹定頼

さしなの記 菅原孝標女

卷第七

賀十二夜於二前武衛一(ガノセンエイニ)和歌序 日 家の集の内 相模

一字傳序 日 大江通国

奥儀抄序 爲家清輔

水うみ序 爲家忠親

定家卜部之文 日

卷第八

卷第九

正治奏狀 日 御裳濯川歌合序 日

日吉七社歌合序 日 日吹 日

民部卿家歌合吹 日 家の集乃内 右京大夫

家集の序 大中臣輔親

我身拾遺序 源俊信

悦目抄序 爲家基俊

後葉和歌集序 榮源法印

撰集抄序 釋西行

高倉天皇幷遷の記 日

安元御賀の記　俊忠卿隆房

巻第十

百詠和歌序　日

和歌色葉集序　釈寂恵

後成九十賀記　源家長

賀茂大明神よみ百首和歌序　日

老若和歌序　日

早率露膽百首歌　日

色葉和歌集序　日

百首和歌跋　日

松下納言定家卿よ勝る文　日

堂玉集序　日

方丈記　日

巻第十一

千五百番歌合勅判序　後鳥羽天皇

遠島御歌合序　日

新撰和歌集跋　日

原注無動跋　日

富河歌合跋　日

長綱百首の綸よ志る世る詞　日

巻第十二

人丸よ御ふせる文　歌部御定

芳村序　源通光

七十番歌合跋　藤原光俊

宝治歌合跋　日

巻第十三

松下納言為家卿五七日の歌文　日

隣女集序　藤原雅有

野守のかゞみ序　源有房

日吹　日

巻第十四

賀茂社初参也　日

李花集乃うち　京極為兼

又　日

又　日

巻第十四上

中務内侍日記　中務

御子左家古今集　日

名和長年よ志る勅書　於鹿瀬之令

又　日

又　日

住吉歌序　源義政

年中行事歌合序　藤良基

艶詞　日

蒙求和歌序　源光行

愚管抄序　秋岳円

奉納聖霊院和歌序　日

筑紫道長沈惨る詞　日

赤門大臣麦る文　藤原隆

発心集序　鴨長明

東関紀行　源親行

弘長歌合序　藤原為家

家隆卿よ志る文　日

和歌初心抄序　日

嵯峨野物語序 日
巻第十四下
愚問賢注序 日
白露記 日
筑波集序 日
巻第十五
愚問賢注跋 釈顕昭
歌学の僧の嫉、於まさ
落書露顕序 日
道ゆきぶり 日
巻第十六
源氏物語提要序
源範政
巻第十七
相国寺塔供養記 菅原為嗣
筑波問答序 日
神薬日記 日
都のつと跋 日
さゝ栄ざゝ 日
小島のすさび 日
雲井の御法 日
雲井曲水 日
くさ〴〵の詞 日
愚問賢注跋 釈顕昭
都のつと 釈宗久
鹿苑院准后義満公厳島詣記 日
河海抄序 源光成
伊勢大神宮参詣記 僧侶
北山行幸記 日
巻第十八
両聖記 日
後小松天皇升遐の記 日
巻第十九
巻第二十
山々の記 貝常祝士
文明歌合序 日
三源一覧序 蔡俊通
七百番歌合序 菅原為祝
むくの木稚木序 日
仙源抄跋 日
鹿苑院准后義満公御詠
富士記行 菅原雅世
椿葉記 水原宗光
富士記行 菅原雅世
春宮御元服之間之事
和歌入学序 菅原雅世
世鏡抄跋 源義政
慈照院准后義政公自歌合跋 日
五月雨記序 郁芳祝王
魚山の仏法 光胤法親王
嘉吉三年歌合序 菅原為良
文安詩歌合序 日
雲井の春 日
年立の序 日
南都百首序 日
苅萱の記 日
古今童蒙抄序 日
歌林良材集序 日

勧修念佛記序　仙洞歌合跋
世諺問答序
巻第二十二　ちぐさの草　釈西仏
宇治川懐紙哥序　山乃うすみち　藤原雅康
巻第二十三　西行法師家集　藤原基綱
答西楼実隆尼歟子ガ失妻和歌序　藤原実隆
世鏡抄序　藤原冬良
夢庵記　釈宥柏　三愛記
雲井行平法眼
巻第二十四　釈阿和歌序　藤原為家
中原遠忠自歌合跋　細川名京大夫自歌合跋
慰参議基綱卿失妻餘哀和歌序　藤原実陰
巻第二十五　世諺問答跋　藤原為家
三塔順禮記　高野山参詣記
武蔵野記行　平氏康
巻第二十六　桂林集序　藤原実枝
清見の記　永禄歌合跋　藤原資定
長源院とてよめる詞　百首和歌序　藤原公條
品川とてよめる和歌序　光源院贈左府追善三十一字和歌序　釈芙俊
かりさき松の記　藤原為和
きぬがさの記跋　名香合跋　藤原資直
答資直卿和哥序
巻第二十七　秘抄序　藤原為家
高野山参詣記
永禄歌合跋　藤原資定
百首和歌序　藤原公條
称名院右府七十賀記　藤原植通
雅春卿詠ずる詞　釈道沈
嵯峨記
光源院贈左府追善三十一字和歌序　釈芙俊
九州道の記　源為序
竹林抄序　藤原為家
法乃もり　藤原為家
関東海道記
答西楼実隆尼請和歌序
ちぐさの草の記跋
新百人一首跋　釈道與
雪をわけ西芳寺にいたる詞　藤原良義

凝疑抄跋 ロ　夢想記 ロ

巻第二十七　岷江入楚序　源通勝

贈左大臣義晴公を悼る辞　為尚お久

准后道澄法親王を悼る和歌序　為尚信尹

為尚えまかりいさめる辞 ロ

夕顔巻辞 ロ　代贈豊別槐辞 ロ

又 ロ　恕仙法印を悼る辞 ロ

陽光院三十三回忌追善の辞　奥書法印

式部少輔仁親王を悼る和歌序　好仁親王

巻第二十八　日光山記行　為尚光廣

道の記 ロ　春の曙 ロ

式部少輔仁親王を悼る和歌序 ロ

さくまくら ロ

贈左大臣信長公を悼る辞 ロ

太陽院殿いさめる辞 ロ

かやぐき　為尚甫

子賀右宗隆辞 ロ

後陽成天皇升遐の記　平時庸

後陽成天皇を悼る辞 ロ

十介

花見の記 ロ

医道浄阿弥陀仏の辞 ロ

三島明神に法華経奉納する和歌序 ロ

萬里江山石の記 ロ　あづま路紀行 ロ

百椿図序 ロ　後陽成天皇崩御を悼る和歌序 ロ

後陽成天皇崩御を悼る辞 ロ　式部少輔仁親王を悼る和歌序　良恕法親王

巻第二十九上　東山に家記　豊臣秀俊

西山に家記 ロ　浅間の記 ロ

さらご記 ロ

大井川道遥記 ロ　同さま〴〵第跋 ロ

九州のたび記　為尚民成

巻第二十九中　朝ぼらけ ロ

そでのわかれ ロ　春の山ぶみ ロ

五妻の道の記 ロ　厳山ようでし ロ

花山のおとし ロ

ぬすびと取縄ほどき辞 ロ　稲葉内匠頭ひろすけ ロ

妙秀尼ひろすけ ロ

笹紙中ちらし ロ　道春法印ようすけ ロ

那波道喜つるの ロ　春日作左つぼやの銭利 ロ

作り田の何とやら ロ　妙秀尼銭利 ロ

永喜法印餞別 ㅁ　　西意法橋餞別 ㅁ

巻第二十九下　　道家餞別 ㅁ

稚の心ひきうる詞の初 ㅁ

玄旨法師をくる梓 ㅁ　　橘葉再逢といへる梓 ㅁ

うたの心 ㅁ　　くまのまさご ㅁ

なごえのこと ㅁ　　辞世 ㅁ

巻第三十　　女房いたわる梓 海尚書家

惺窩文集序 ㅁ　　於長講堂催和歌序 ㅁ

報源光一詩歌序 ㅁ　　又 ㅁ

日光山法華八講記 ㅁ　　仙洞御色紙記 ㅁ

嵯峨遊覧記 ㅁ　　成元餞別記 ㅁ

前の相公伏悼る和歌序 ㅁ　　奉納菅廟詩歌序 ㅁ

九月十三夜和歌序 ㅁ

八瀬詞 ㅁ

関東海道記 ㅁ

友欣いたわる和歌序 ㅁ

宇治興聖禅寺記 ㅁ

扶桑拾葉別集 写本 三巻

上巻

長元八年殿上歌合記 作者不知

寛勝四天王院名所障子和歌

新濱木綿和歌集序

等持院八講記

中巻

何人の撰ともしらず 七夕江口世尊寺

東三條院撫子合

珍誉集跋

風葉集序

舞御覧記

北山院御入内記

春日社参記

大嘗會記

新撰筑波集序

艶詞

秋風抄序 小野春雄

奥州後三年記序 法印玄恵

下巻

紫明抄序 素寂法印

続古今和歌集序

枕草紙跋

十訓抄序 菅原為長

新月讃哥序 欠刊行ノ由 同跋 ノ

釋門三十六人歌仙序 僧正栄海

北國紀行 ノ 海道ノ記

種玉篇次抄序 家蔵ノ本 奉納住吉連歌序 ノ

連歌汁校集序 ノ 多々良政弘ノ撰ノ和歌序 ノ

和希菴禅師詠草 ノ 江田世恭撰

拾遺後葉集 写本

同錦一巻ノ外ニ巻首ニ漢字の題言ありて扶桑拾葉集の續集ノ撰ノ
て於ノ 以下 同様ニ書ス

文乃栞

七巻 八冊

校訂の仮名ノ外ニ漢字ノ題言ありて安政丙午ノ春ノ序ノ有
あつて扶桑拾葉集の外ノ文章ノ中ニ於ノ文體ノ佳ナルヲ抄録ス 同様ニ書ス

歌文要語 一巻 建涼撰

くさづくし ノ 一巻 同上

後編くさづくし ノ 一巻 同上

國文世々ノ跡 再考 三巻 蒿渓伴資芳

譯文童諭 二巻 同上

右

天保五甲午春正月九日 抄出之

中村蕃喜直道

記行類

土佐日記　一巻　紀貫之
土佐日記附注　一巻　三本　人見卜幽
土佐日記抄　一巻　北村季吟著
岩首土佐書題号ゟ 京極黄門の奥書妙寿院の奥書迄の事柄を抄録す　完文元年酉刊行す
土佐日記首書　二巻
土佐日記注　写本　一巻　藤原守文
渕磨記　写本　一巻　菅家の作仮といひくさ〻のものゝ事を記す　作者未詳

松島日記　写本　一巻
十六夜記　一巻　阿仏尼
長明道の記　一巻
長明海道記　一巻　二本
東関記行　一巻　源親行
藤川の記　二巻　一条禅閤兼良公
宗長西國紀行　写本　一巻　一年筑紫の紀行と称す 宗祇の作とす 誤伝
四國離記　一巻　准后道興親王
一名宗祇四國記と号す 宗祇の作にあらず 道興の事跡を記す
西廣日記　写本　一巻　西廣ハ徹書記の弟子なり

時ゝ〻ゟ 写本　一巻

普光院義教公等土佐院の記りるゝ
義政の家ゝはりつゝ以下廣橋ゟ写ゝゝゝゝゝ

身延記行　二巻　深草元政（どそう）

鎌倉記行　一巻　澤菴和尚

温泉遊草　一巻　深草元政

春の曙　一巻　烏丸光廣卿

窓の曙　写本　二巻　似雲法師

うらみの涙の記　写本　一巻　烏丸光栄（なが）公

修学院御幸宸記　写本　一巻　霊元法皇

道ゆきふりと　写本　一巻　賀茂真淵

菅笠日記　二巻　本居宣長

東奥記行　一巻　長善水

詞林意行集　六巻　宮川一翠子

紀行の文と西国ゟおもわく私家漢文ゟ（ママ）或ハ物語ゟともの也

巻之一 東方　都乃つと　篠崇宗久

宗祇終焉記　釈宗長

東國陣道記　細川幽斎

巻之四　石山記行　西三条公條公

東山道記行　那波久爺　江府記行　小出粟原

江東吟稿　日　遊（ママ）覧湖寺詩　菅原去日

瞻形記行詩　菅原去日

自尾州熱田至藝陽廣島路行之詩　梁南和尚

和石州山村藝陽途中詩　林道春

巻之二　小島のすゝみ　二条良基公

巻之三　東道の記　仁和寺ゟ

東関記　沢庵和尚

石山記行　沢庵和尚　石山詣の記　祭酒泊

東行雑詩　平巌仙桂

遊神明山記　雪堂ゟ士

巻之五　西南方

藝陽道行詩　石川丈山

遊有馬温泉記行　松永昌三

同和韵　蕃東之日　　懐有馬温泉記　李彦云宏
南行詩　那波乃条　　南行詩　大秀和尚
隱岐記行　水戸藤民成　　卷之六北方
甲辰記行　日　　渭北吟稿　平巖仙桂
大原記行　詩　仙桂　歌　盤谷　　丹後海陸順路日録　留完
　　大原和韵　亦門一翠子
拾遺意行集　　大原記行
嚴島詣日記　今門子俊　　南遊詩　策彦和尚　　一卷　同上
七巳行記　平巖仙桂　　吉野詣記　四条篠公
　　今津水山記　山崎敬弐

右

天保五甲午年　晋九日抄出之

　　冨書一覧卷之三終　本書一百四葉

備忘抄卷之中終

南州記行　友昌琳
吉野花見記　加茂磐水
大原記　石京之史
中村萬喜蕉道